

## 第8章 温泉観光の過去と現在

- |     |            |         |
|-----|------------|---------|
| 第1節 | 観光様相の歴史的展開 | (中山 昭則) |
| 第2節 | 観光客の推移     | (中山 昭則) |
| 第3節 | 湯治宿の状況     | (中山 昭則) |
| 第4節 | 湯治客の意識     | (中山 昭則) |

# 第1節 観光様相の歴史的展開

## 1 観光黎明期

### (1) 瀬戸内航路の開設から始まる別府観光

別府観光の幕開けは、明治4年(1871)県令松方正義によって別府(楠)港が整備され、明治6年(1873)の別府港の整備と大阪航路の開設から始まったといえよう。この航路は大阪開商社によって開かれたもので、蒸気船「益丸」18トンが月1往復した。ルートは大阪から香川県の多度津・広島県の鞆の津・愛媛県三津浜を經由して別府に至るものであった。

2年後には満珠丸、金刀比羅丸、安全丸、大西丸、凌波丸も就航し、大阪と別府を結ぶ瀬戸内航路は競争時代を迎えることとなった。しかし、当時の開運業者は「一船一主」の状態であったといい、激しい競争はやがて各船首(船会社)を苦境に追い込み、船首たちは合同し豊栄舎を起こした。さらに明治13年には荒金猪六らが起こした別府会社も山城丸を就航させた。その後、岡山開行舎を初めとした数社も参入した。これら航路によって別府温泉郷は京阪神地方と直接結ばれることになり、外来客を本格的に迎え入れることになった。

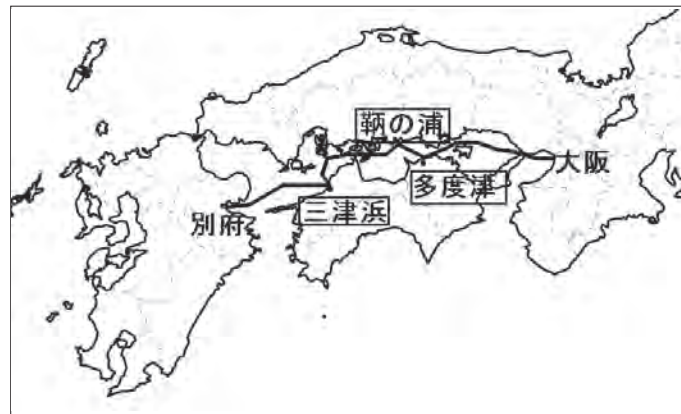


図8.1.1 瀬戸内航路開設当初のルート

しかし、激しい競争を展開していた瀬戸内航路各社の経営環境は厳しさを増し、やがて船首が一体となって汽船会社を設立すべきだとの機運が高まり、明治17年(1884)大阪商船株式会社が設立された。

大阪商船は大阪と瀬戸内海・四国各地や遠くは朝鮮半島の釜山・仁川、奄美大島・那覇にまで及ぶ18航路(本線)と4航路(支線)を有する一大汽船会社であった。その内別府港に寄港したのは第8本線(大阪-細島航路)と第9本線(大阪-宇和島航路)であった。運航日も開設当初の月3回から、6回そして8回と増便し明治30年代には毎日運行となった。当時まだ鉄道は開通していなかったため、大阪商船が観光客の旅客輸送に果たした役割は計り知れなかった。

明治30年代に入ると、県内の守江・日出・津久見への寄港や300トン級船舶の就航と航路を拡充させた。この結果、明治34年(1901)には乗船者数は30,202人に及んだ。

明治44年(1911)鉄道が日出まで延びると、大阪・鹿児島航路を別府に寄港させ輸送力の強化を図った。また、1,000トン級のドイツ製客船「紅丸」を導入し、これまでの貨客船から客船専用とし行程も3日間から2日間と短縮させた。

一方、別府を寄港する船舶は増加した。例えば、馬関-長州、尾道-別府、赤間関-大分、別府-佐伯、大阪-四国-豊州といった航路であったが、航路の統廃合や寄港地がめまぐるしく変わるなどした。

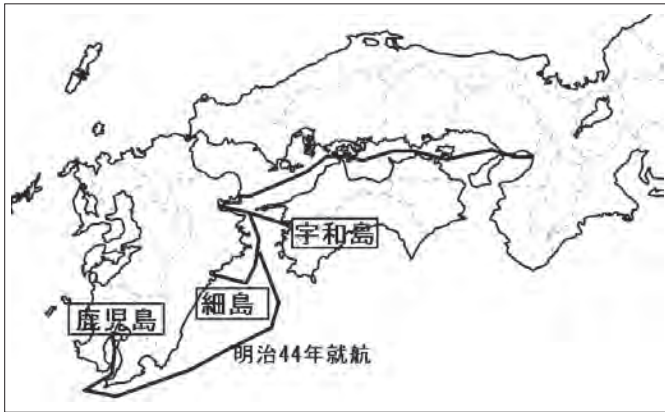


図8.1.2 大阪商船の航路（明治期後半）



写真8.1.1 大正初期の別府港

## (2) 「湯突き」の導入による温泉開発の拡大

さらに、別府温泉郷が観光地として飛躍する契機となったのは、「湯突き」と呼ばれる温泉掘削技術の導入である。この技術は、明治15年（1882）地元の豪商荒金猪六が掘削したとの記録が最も古い。

湯突きによる温泉掘削によって、これまで自然湧出に依存していた温泉資源が人為的に獲得可能となったため、別府各地で源泉掘削が広まった。その湯口数は明治38年（1905）は198孔であったが、その6年後の明治44年（1911）には593孔と増加し、さらに大正12（1923）年になると1,584孔にまで達した。

こうした温泉掘削の乱開発による源泉の枯渇に対する懸念が広まり、大分県は大正元年（1912）に鉱泉取締規制を設けた。

別府温泉郷は次第に温泉観光地として各地からの来客を迎えることになり共同温泉も賑わいを見せてきた。

別府および浜脇両温泉は僅か2年で入浴客数が10倍前後増加し観光地化が劇的に展開していた。一方、鉄輪温泉の各共同浴場は3.5倍の増加で緩やかなものであった。さらに、蒸し湯に関して言えば入浴客数の伸びは横ばい状況であった。

こうした背景には、この頃別府温泉の竹瓦温泉を始めとした共同浴場が大分県の事業によって新築されたという状況があったのである。

明治初期の温泉地の様子は『豊後国速水郡村誌』に詳しい。当書は明治9年（1876）当時の各村の人口・戸数から地勢、産物、民俗に至るまで記され当時の様子を多角的に窺い知ることができる。現在の別府市域に該当する11カ村に関しては温泉に関する状況も記されている。これによると11カ村の内温泉があるのは8カ村で計31か所、入浴場は7カ村に36か所を有すると記載されている。旅館は142軒を数え、年間浴客数は1万9,200人と記されている。

入浴客の62.5%、そして旅館の半数は別府・浜脇両村に集中しており、この両村が外来者を迎え入れる温泉地として栄えていたことが知れる。海岸に面した両村はこの頃既に阪神地区と航路で結ばれいわば別府の玄関口と

	明治12年	明治14年	対明治12年比
鉄輪・熱ノ湯	1,985	7,500	3.78
鉄輪・熱ノ湯	1,984	7,500	3.78
鉄輪・蒸風呂	1,920	2,000	1.04
亀川・四ノ湯	800	600	1.00
別府・楠湯	4,200	24,900	5.93
別府・不老湯	800	20,800	26.00
別府・永石湯	1,100	22,400	20.66
浜脇・西ノ湯	3,000	25,000	8.33
浜脇・東ノ湯	4,200	25,000	5.95
野田・芝石湯	400	400	1.00
南立石・観海寺湯	1,100	35,000	3.18
南立石・堀田湯	1,900	35,000	1.84
	23,291	143,100	6.14

表8.1.1 別府温泉郷主要共同浴場浴客数推移（明治12-14年）

（注）『別府市誌』昭和60年度版478ページより作成

して大きな役割を担ったものである。

さて、現在のJR日豊本線が別府に到達したのは、別府-大阪航路の開通からおよそ40年を経た明治43年(1910)のことであった。この鉄路は当初は民間会社によって計画されてきたが後に国有鉄道として整備されることになった。しかし、鉄路が別府に至るまでにはかなりの時間を必要とした。まずは地形的な制約とルート策定に手間がかかったのである。最も難航したのは宇佐・亀川間といえる。当初は立石峠の難所を回避するため、宇佐から豊後高田、旧太田村を經由して杵築市街を經由する案が有力視されていたが、直線ルートで結ぶとして現行ルートに決まった。

このルートが決定した後は、一気に別府まで繋ぐことができたようである。この鉄道工事に関連して別府にやってきた技術者たちから、風光明媚な別府の景観に感動して後に私財を投げ打って別府の開発に取り組んだ者も輩出している。

村名	温泉数	浴場	年間浴客	旅館
内 竈	2	—	—	—
野 田	3	1	300	2
亀 川	2	2	800	8
鉄 輪	7	2	3,000	34
鶴 見	5	4	1,000	10
北石垣	—	—	—	—
南石垣	—	—	—	—
南立石	3	2	2,100	18
東 山	—	—	—	—
別 府	6	10	6,000	40
浜 脇	3	15	6,000	30
	31	36	19,200	142

表8.1.2 明治初期の別府温泉郷の状況(明治9年)  
注)『豊後国速水郡村誌』より作成



写真8.1.2 明治期の竹瓦温泉



写真8.1.3 明治時代の旅館街① 北浜



写真8.1.4 明治時代の旅館街② 鉄輪

## 2 観光展開期 大正中期～昭和初期

### (1) 地獄の観光資源化

別府温泉郷は大正時代を迎えると大きく発展を遂げていくことになる。当時の別府観光の発展を支えたのは外来からやってきた人々であった。

別府温泉郷を全国区に押し上げた最大の功労者は「別府観光の父」と呼ばれている油屋熊八であることは疑いの余地はない。しかし、彼が別府で活躍する10年ほど前から様々な人物が別府の魅力に取りつかれて開発を手掛けているのである。

今日でも別府観光の目玉商品である「地獄巡り」は、油屋熊八による「ガイド付き遊覧観光バス」との係わりで語られることが多い。しかし、地獄を観光資源としていち早く着目したのは、鉄道技師であった千寿吉彦であった。彼は明治の末に日豊本線の敷設工事で別府にやってきた際、その風光明媚な土地に魅かれ開発の夢を膨らませたとされている。

当時点在していた地獄は「厄介もの」扱いされてきたという。長雨の後には地獄（熱泉）の水位が上がり、溢れ出した熱泉によって田畑が荒らされたとの記録も残され、江戸時代以来各地獄の所有権は次々と変わっていた。正しく『闘士に一升瓶を付けるから持って行ってくれ』とまで言われていたのである。

千寿はこのような扱いを受けていた海地獄を別荘地の泉源という全く新しい発想に

よって買収したのである。恐らく新たな湯口を掘削するよりは経済的にも有利であったと考えられるし、この頃には既に規制の網も掛かり始めていたことも背景にあったであろう。千寿は温泉付き別荘地の開発を構想し今日の新別府一円を開発した。その泉源として海地獄を買収している。

この地獄がさらに新しい局面を迎えることになった。そのきっかけは、明治43年（1910）海地獄を覗き見していた湯治客に対して、海地獄の管理人が二銭を徴収したことが始まりとされる。つまり、これまでの「厄介もの」が「見せ物」に転換したのである。

「1日3円も水揚げがあるとホクホクだ・・・」との記録も残されており、概算すると1日百人以上は見学に来ていたと思われる。

地獄が湯治客の「見せ物」としてそれなりに価値のあることが判明し各地獄の所有者も海地獄に続いた。さらに、所有者たちは競うようにして各地獄に嗜好を凝らしはじめ、後の観光遊覧バスの開通時にはテーマパークさながらの施設が次々と誕生していった。

地獄ばかりか別府温泉郷の名が一躍全国に知れ渡ったのは、昭和天皇（当時皇太子）による巡幸の報道によるものであった。また、巡幸に合わせて道路等の環境整備もおこなわれ、地獄の所有者たちはこれを好機とみるや遊園地を押し進めていったといわれている。

海地獄は「自然美豊かな一大遊園地」をキャッチフレーズに掲げ、自然庭園と遊歩道を売り物にしていた。血

地獄名	面積	関連施設	お土産品	売店面積
海	3,000坪	自然庭園と遊歩道	地獄絞り、竹細工、湯の花	40坪
血の池	1,000	庭園風園地	地の池膏、血の池染め、竹細工	簡易施設
龍巻	100	間欠泉(30分毎に1分間噴出)	記載なし	30
坊主	不明	地獄の泥を陸軍病院へ	坊主饅頭、地獄染め、湯の花	60
鉄輪	120	貸し間業	湯の素、西瓜糖、湯の花	不明
白池	500	隣地に入浴施設と旅館	白池膏、白池胃腸薬	10
鬼山	300	温泉利用のワニ養殖	ワニ皮細工、擬皮製品	10
窟	不明	地獄に因んだ遊歩道	湯の花、胃腸薬、竹細工	30
鬼石坊主	500	不明	坊主膏、湯の花、竹細工	30
鶴見無間	500	湯の花採取と製造施設の公開	地獄焼人形、別府絞り、湯の花	30
八幡	500	怪物館(別途料金)	八幡地獄膏、寿命膏、鎮痛液	30

表8.1.3 地獄の施設

注) 田中・後藤(1942)および『別府市誌』(1933)より筆者作成



写真8.1.5 当時の地獄の写真① 海地獄



写真8.1.6 開業当時の地獄② 坊主地獄



写真8.1.7 開業当時の地獄③ 照湯地獄



写真8.1.8 当時の地獄の写真④ 鶴見地獄

の池地獄は庭園風園地を造成し、草葺家屋や生垣を配置し、鬼山地獄は当時世界初となる温泉を利用したワニ養殖に成功し、大ワニ10匹、子ワニ12匹を公開している。このワニの養殖は今日も行われている。

竈地獄は「一丁目閻魔の茶の湯」「二丁目七変化坊主」「三丁目釜地獄」「四丁目極楽」と銘打った遊歩道を整備し、八幡地獄は別途入場料を徴収するものの「怪物館」を開設している。

他方では、様々な土産物も開発されている。例えば、当時既に別府の名産品として名高かった竹細工と別府絞りは大半の地獄で販売されていたようである。この竹細工は明治初期から湯治客の土産物用として作られ、昭和7年（1932）当時の生産額は90万円に上っている。

別府絞りは明治中ごろ海地獄で創作されて広まり、昭和初期には年150万円を売り上げる代表的な特産品となっていた。その他、泉質の効能を売り物にした軟膏や胃腸薬も売られていた。

## （2）地獄組合結成の経緯

過熱する一方の地獄の遊園地化は、湯突きによる地獄の新たな掘削ならびに湯口の拡幅工事も引き起こし、温泉資源枯渇が危惧されるようになった。当時遊園地化していった地獄の幾つかは後に泉源が枯渇してしまっている。

また、過大な誘客競争も問題となっていた。誘客の方法は特定のバス・タクシー会社と結んで強引な客引きをするというものであった。その背景には、小規模なバス会社やタクシー会社が乱立していたという状況がある。その結果、来客からは目的とする地獄を見られないとの苦情が相次いだといわれている。さらに、観光客は地獄ごとに入場料を支払わなければならない、大きな負担を強いられていたようである。

このような厳しい事態と批判に対して各地獄所有者たちも対応を迫られ、組合組織としての対応を図ることとなった。しかし、組合組織の結成において、共通入場券の発売に向けてその料金設定等で調整がつかず、組合結成は幾度か挫折寸前にまで追い込まれたのであった。

しかし、時局は戦時色が強まり企業統制の波が押し寄せてきた。また、観光などの余暇活動に対して厳しい目が向けられてきたこともあり、昭和13年（1938）「別府地獄遊覧組合」の設立にこぎつけた。

### (3) 地獄めぐり遊覧バス

皇太子の巡幸によって全国的に名が知れ渡ることになった別府温泉郷ならびに地獄であるが、この機を逃さなかったのが油屋熊八であった。彼は亀の井バスを設立して、昭和3年(1928)には全国初の試みとして「ガイド付き遊覧バス」の運行を開始した。

遊覧バスには当時としては画期的な25人乗りバスを4台配置し、午前7時30分から25分毎に運行した。女性バスガイドの七五調の案内は話題を呼び、連日満員の乗客を乗せて北浜を出発したといわれている。

また料金を一周1円で乗り降り自由とした。この価格は同時期の別府と海地獄間のタクシーならびに馬車の往復料金2円50銭と比べても破格なものであった。このため、人力車人夫やタクシー運転手の猛反発を買い、時として停留所が壊されたりしたという。

このように大人気を博した遊覧バスは、昭和7年(1932)には大橋自動車商会が参入し、さらに昭和9年(1934)には京都自動車も参入しここでも競争が始まったのであった。

しかし、昭和16年(1941)時局の変化に伴って産業界に対する統制令が敷かれ、地獄めぐりの遊覧バスは亀の井バスに統合された。一時は地獄巡り遊覧バスそのものが廃止されようとしたが何とか免れたという経緯もあった。



写真8.1.9 観光遊覧バス

## 亀の井遊覧バス

(我國に於ける遊覧バスの嚆矢)

電話(一〇七六) 一三九 八一三番  
電話(七八四) 一六六 七八四番

大阪・別府定期航空部 電話七八四番

地獄めぐりは  
朝日に映えて  
踊る湯けむり

乗ればニツコリ  
渦巻くいで湯

乙女の車掌  
海の見晴し

名所解説面白  
見飽かぬ山に

眼ふ車内のなごやかさ  
色はコバルト海地獄。

鶴見・八幡・石垣原と  
燃ゆる情の  
胸の火よりも

行く手樂しき  
赤い血の池

遊覧コース  
煮え立つ磁

動く野山の  
めぐりくいて  
速見が浦に

景色に見とれ  
速見が浦に

バスの小揺れの乗心地  
關の煙を見て歸る。

超特大型高級自動車使用  
毎廿五分此處から發車  
車上では女車掌が名勝を解説  
し、おもなる遊覧地は繁華専  
属の案内人が御案内致します

### 地獄めぐり

下車遊覧共二時間乃至三時間  
一周御一人金一圓  
當日中途乗降御隨意

入場券  
見物券  
リベク

主坊新  
萬十  
山見  
輪鉄  
リベク

\* 嗜評好轉運酒禁

図8.1.3 地獄巡りの案内

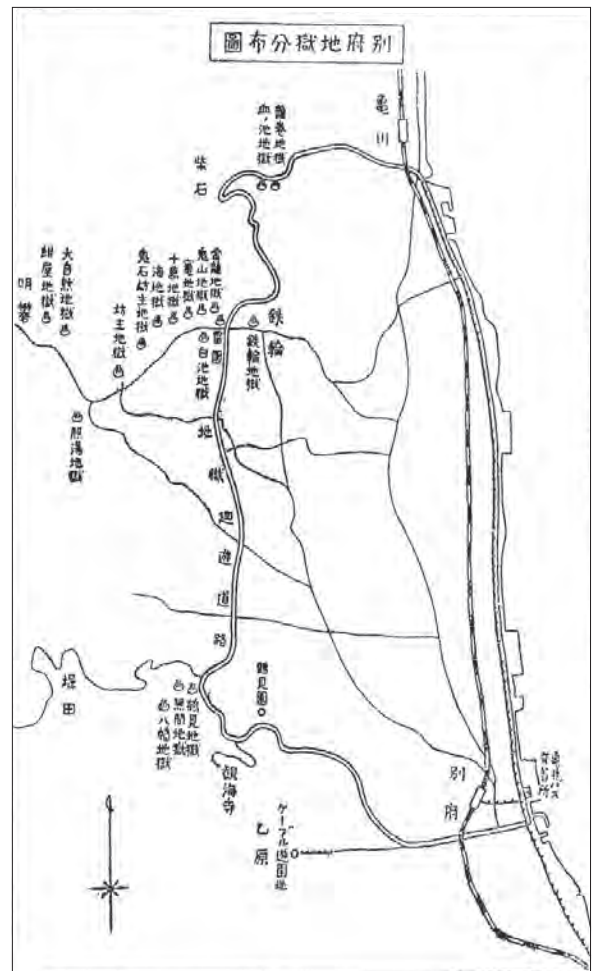


図8.1.4 地獄めぐりバス案内

#### (4) 観光施設の相次ぐ開業



写真8.1.10 開園当時の鶴見園



写真8.1.11 戦前のラクテンチ



写真8.1.12 戦前の松原公園

別府温泉郷が観光地として全国的に知れ渡るとともに、市内各所に観光施設の整備が相次いだ。

まず、大正14年（1925）に別府鶴見園が開園した。この施設は鉄道工事で財を成した広島県出身の松本勝太郎によって開発されたもので、当時阪神地区で人気を博していた宝塚を模して歌劇団を結成し、「西の宝塚」をめざした。収容人員600人の大劇場を建設して歌劇団を結成し、当時宝塚・松竹と並び称せられたという。

入園料は大人四十銭、小人半額で、これで観劇は無料となるとともに、大浴場、蒸湯、滝湯、砂湯、家族湯、温泉プールといった施設も利用できた。また、大食堂や宴会場も完備され、総合レジャーランドとして別府の名所として君臨した。

次いで、昭和3年（1928）には東京の鉱山会社「木村商事」によって「ケーブルラクテンチ」が開園した。同社は当初金・銀鉱山開発を行っており、明治の末には540トン程度の産出量があったといわれている。

しかし、温泉の湧出量が減りだし泉源の枯渇を恐れる地元の要望を受け遊園地としたとの説もある。

入園料は大人五十銭、小人半額で、当時は珍しかったケーブルカーに乗車して入園するというユニークな仕掛けが話題を呼んで子供たちの人気を集めた。施設としては、遊園地とともに展望温泉、食堂売店、乙原地獄、ベビーゴルフ場、演舞場などが整備された。

この当時別府温泉郷は湯治を中心とする鉄輪温泉・明礬温泉、保養的な観海寺温泉そして歓楽色の強い浜脇・北浜温泉とに大まかに区分されていた。

とりわけ、浜脇温泉と別府（北浜）温泉は別府港と別府駅、東別府駅を中心として大いに賑わっていた。松原公園は別府（北浜）温泉と浜脇温泉との中間点に位置し、その立地性から公園周辺には劇場、芝居小屋、商店が立ち並んでいた。

このように、昭和初めの別府温泉郷は地獄巡りをメインにしながらも市内各所に大規模な観光施設が点在する一大アミューズメント地帯をなしていたのである。



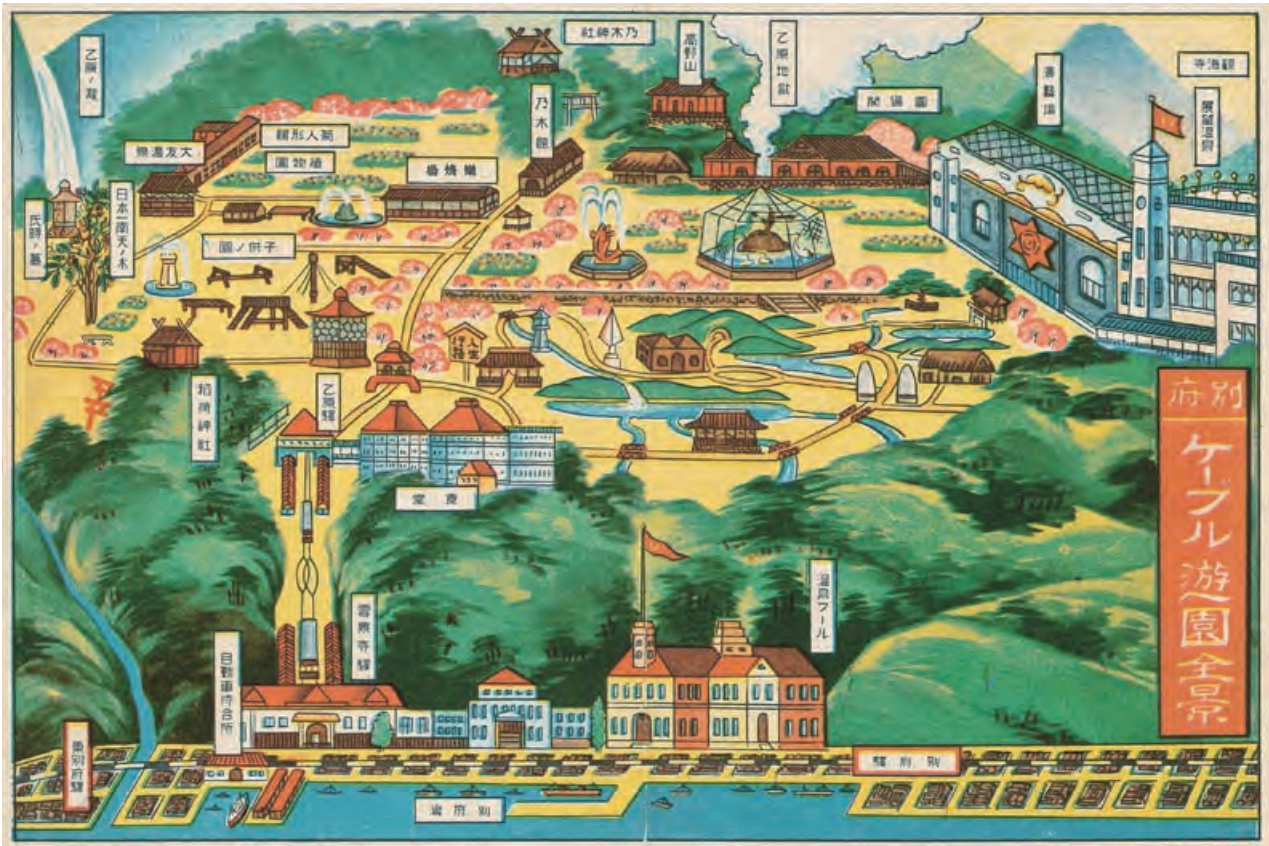


図8.1.5 ラクテンチ パンフレット

### (5) 博覧会の開催



写真8.1.13 中外産業博覧会 温泉館



写真8.1.14 別府国際温泉大博覧会

この頃別府温泉郷を舞台として大きな博覧会も開催されている。当時全国各地で地域産業の育成を意図した産業・勸業博覧会が開かれていた。

まず開かれたのは「中外産業博覧会」で、昭和3年（1928）の4月1日～5月20日の40日間開催された。その開会日には一万人の見学客が押し寄せたとの記事も残されている。全期間中80万人の入場者を集めた。

地獄めぐり遊覧バスもこの開催に合わせて運行を開始している。会場はメインとなる第一会場として別府公園、第二会場として浜脇海岸埋立地が充てられた。共通入場料は大人五十銭、小人半額であった。

次いで開かれたのは、昭和12年（1937）3月25日から50日間にわたって「別府国際温泉観光大博覧会」である。この開催は別府温泉郷が阿蘇・雲仙・長崎とを結ぶ国際観光ルートとして構想されたことによるものである。会場の別府公園には温泉館・観光館・産業本館・大分館・台湾館・朝鮮館・農具機械館・ラジオ館・陸軍館・海軍館といった数々のパビリオンが建ち並び大勢の入場者でにぎわったといわれている。特にラジオ館に人気が集まったようであった。

## （6）別荘開発

地獄の観光地化と観光施設の開設が相次ぎ、押しも推されぬ我が国を代表する温泉観光地となった別府温泉郷であるが、別荘地としての開発もさかんに行われたという側面も見逃せない。

別荘開発の先駆者は、前述の海地獄を買収した千寿吉彦である。千寿は前述の通り海地獄を源泉として「温泉付き別荘地」の開発を鉄輪温泉に隣接する一帯を新別府と称して進めた。別荘分譲地は標準区画を300坪として売り出した。

その後、愛媛県出身の多田次平が大正11年（1922）六角温泉・荘園地区の開発に着手した。しかし、この開発は資金繰りが行き詰まり途中で頓挫するという憂き目に合った。その後を継いだのは、久留米綿で財を成した国武金太郎であった。この六角温泉・荘園地区の開発は大阪の財界が後ろ盾となったとも言われている。

これらの別荘分譲地は在阪の政財界をターゲットとしたとも伝えられているが、実際は台湾、朝鮮半島、旧満州で財を築いた人々が多く購入したようである。

これら別荘地として開発された区画は、戦後その大半は人手に渡り、さらに高度経済成長期になると300坪という敷地が企業等の保養施設用の土地として重宝された。

## （7）市区改正と埋め立て地造成

別府温泉郷は明治末には全国に先駆けて大規模な造成工事を敢行している。一つは「市区改正」でさらに「埋め立て地造成」である。両事業ともに当時では先駆的なものであり、以降の別府市の展開に多大な影響をもたらした。

「市区改正」とは現在の都市計画に匹敵するもので明治39年（1906）の別府・浜脇両村の合併によって別府町が誕生したのを受け、将来的な人口増加が見込まれることと、観光客の急増とともに旅館・商店も増加し、当時の記録の言を借りれば「街衢（がいく）甚だ端正ならざる」状況下になりつつあった。そこで当時の町長によって市街地整備計画がなされた。この事業は昭和3年（1928）にようやく旧別府市域全域が完了し18年に及ぶ大事業であった。この市区改正事業は明治中ごろに東京市が初めて実施し、その後は大都市の市街地整備事業として実施されたもので、当時町になったばかりの地方の一都市が実行したのは極めて稀であった。この事業によって碁盤の目に整備された街区は注目を浴び、別府駅西側（山側）の「田の湯地区」は大規模な別荘分譲地として売り出されている。

一方、浜脇から関の江に至る11kmの海岸は、別府温泉郷の源泉であるとともに砂湯も各地で見られた。また、白砂青松の風光明媚な海岸線は温泉浴客の目を楽しませたという。



写真8.1.15 埋立地の工事

しかし、観光客の増加に伴い市街地は拡大し、宅地確保が大きな課題となった。明治44年（1911）、民間業者によって別府港（楠港）から浜脇に至るおよそ30,000坪におよぶ埋め立て事業計画着工されたが、運悪く台風によって破壊され中断されてしまった。その後大正8年（1918）になってようやく再開され、昭和3年（1928）に完成した。この埋め立て造成地は同年に開催された中外産業博覧会の会場としても利用された。

また、別府港北側22,000坪の埋め立て造成工事も大正4年（1914）から開始され、「鶴水園」と称して分譲され「鶴水園ホテル」の開業とともに文化住宅18戸なども建設された。これによって今日の北浜旅館街の原型が整えられた。

このように、両事業によって新たな土地が供給されることになった。別荘分譲地、旅館ホテル用地、観光施設用地そして博覧会会場、さらには警察署などの官公庁用地として活用され、平坦地の少ない別府市街地に新たな方向性を創り出したといえよう。



図8.1.6 市区改正地図

### 3 戦後から高度経済成長期の観光

#### (1) 国際温泉観光都市の成立

昭和20年（1945）8月、10年以上に及ぶ戦争が終結し平和が戻ってきたが、国土は荒廃し経済も停滞を余儀なくされた。このような状況の中国土復興と国民経済の立て直しは急務の課題となった。別府市街地は戦災を受けることもなかったが、終戦同年10月には米軍の先遣隊が兵舎建設の下見に訪れている。翌年3月から建設が始まり12月には進駐してきている。

別府観光再建の動きは、昭和22年（1947）8月の「国際観光港設置期成会」の結成から始まったともいえよう。同月には阪神間との航路が復活し、再建に向けた動きは徐々に加速を早めていった。

別府観光の再建に向けた本格的な動きは、昭和25年（1950）7月の「国際観光温泉文化都市建設法（以下、都市法）公布からといえる。

しかし、この法律は憲法第95条の「一つの地方自治体にのみ適用される特別法は、法律の定めるところにより、住民の投票においてその過半数の同意を得なければ、国会はこれを制定することは出来ない」と定められている通り、住民投票の実施と過半数を上回る同意が前提となっている。

このため、法案成立賛成派は150回にのぼる集会を開き、棄権防止と賛成票を訴えた。一方反対派は、別府国際観光港の位置は市街地より離れているため旧市街地は廃れると唱え、さらに、区画整備・上下水道工事など付帯工事に83億円もの巨費が必要で財政を圧迫する事業であると訴えた。

住民投票は同年6月15日に実施され、その結果、賛成2万9,487票・反対9,858票で賛成（同意）票が過半数を上回った（『別府市誌』昭和60年版526ページより）。

#### (2) 別府開発計画

都市法の成立とともに別府市は大胆な開発計画の青写真を描いた。まず、別府国際観光港を整備するとともに現在の石垣地区に「新別府駅」の開設を意図した。また、石垣地区に新設を計画していた新駅から実相寺までケーブルカーを敷設する計画も立てている。さらに、カジノの開設も構想され、これらの中核施設として「実相寺パレス」と称する施設が計画されていた。

都市法が公布された同じ月には「ケーブル遊園」が「ケーブルラクテンチ」と改称し、タイからインド象が輸入された。

翌昭和26年（1951）になると観光開発の動きは加速した。まず2月には後の「九州横断道路」となる「国際観光道路」の観光港から堀田まで着工された。10月には国際観光港の起工式が挙行された。さらに、国鉄（当時）は東京・都城間の急行「高千穂」の運行も始まり初めて東京直通の列車がお目見えした。

昭和28年（1953）には由布岳・鶴見岳が阿蘇国立公園に編入された。こうして別府温泉郷は戦前の地獄巡りを中心とした観光地とは装いを新たに再建の道筋をつけていったのである。

この頃になると交通機関の再整備も進み、昭和26年（1951）には、関西汽船は大阪－別府間に、るり丸、にしき丸、こがね丸の2,000トン級の豪華船を就航させた。そして大阪航路が毎日1往復、四国宇和島航路が2往復で、年間30万人の乗降客を記録している。

また旧国鉄は、別府駅を中心に亀川、東別府両駅を加えて年間乗降客は440万人に達した。さらに市内には大



写真8.1.16 戦後の鶴見園

分交通の別大電車が走り、バス路線は大分交通が県下はもとより福岡、小倉方面に路線を延ばしていた。

市内観光の亀の井バスは、地獄めぐり、由布院線、安心院線、<sup>あじむ</sup>明礬線、明礬線、亀川線、ケーブル線、そして日田との急行バスも運行を始め、観光客の便を図っていた。

一方、温泉場連絡機関として戦時下にも運航されていた地獄めぐりバスであるが、終戦直後の燃料不足の折には何とか調達できる軽油を使い、ディーゼルバスの運行でしのいでいた。昭和20年代の地獄巡りバスの料金は80円、地獄観覧料（共通券）は大人70円との記録が残っている（西日本新聞社『西日本都市大観』）。

### (3) 高度経済成長期

#### 1) 別府の賑わい

昭和30年代に入ると我が国の経済力は急速に回復を遂げた。昭和32年（1957）3月20日から2か月間「別府温泉観光産業大博覧会」が開催された。

この博覧会は九州横断道路の着工を記念して開催されたものであった。テーマは「観光と温泉」で、開催期間は3月20日から5月20日までの60日間であった。メイン会場は占領軍キャンプ地の跡地（旧競馬場）とした。入場券は前売り券が大人140円、当日券は大人150円、子供80円であった。会場には50もの施設・パビリオンが建てられるなど大掛かりなものであったようである。初日から1万人もの来場者を記録し大いに賑わったが、会期中には利権を巡る抗争も生じた。

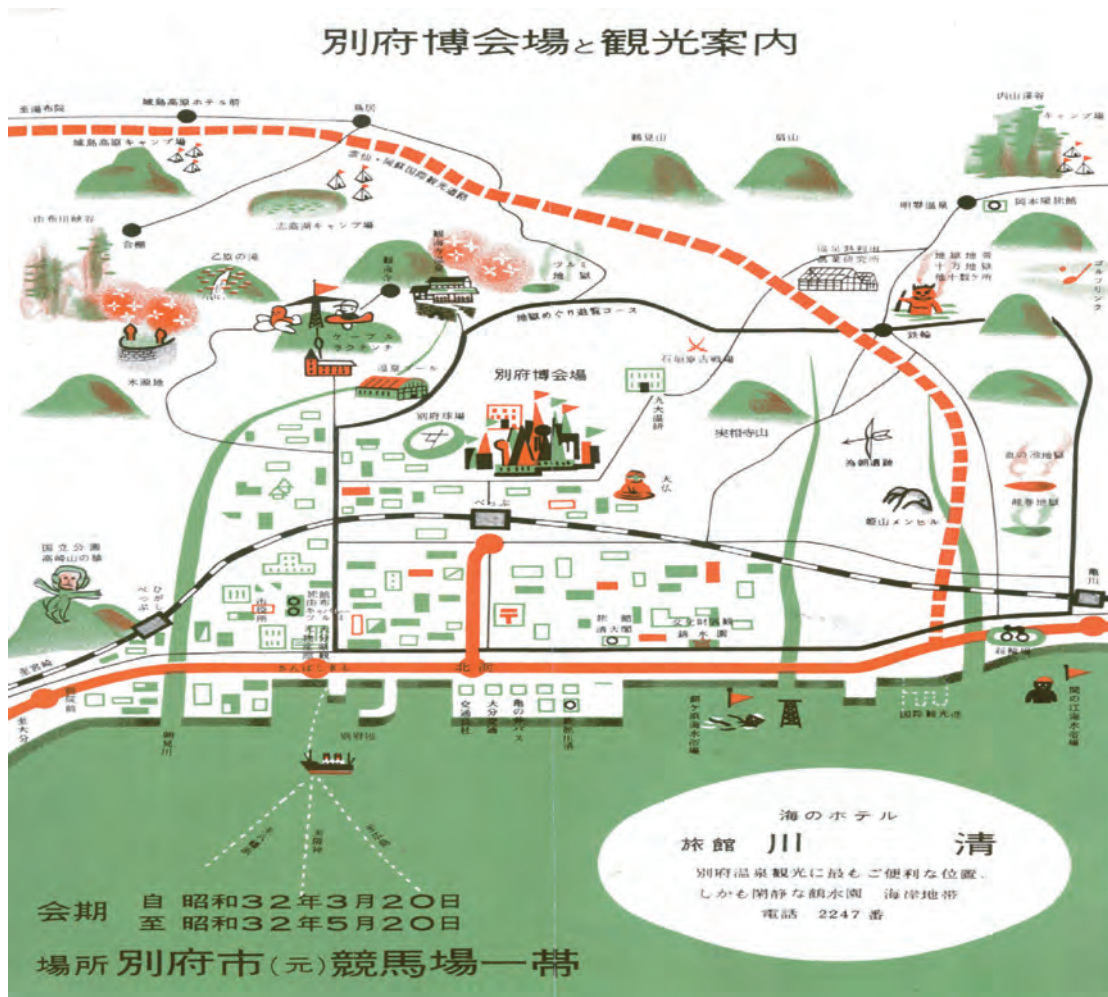


図8.1.7 博覧会パンフレット

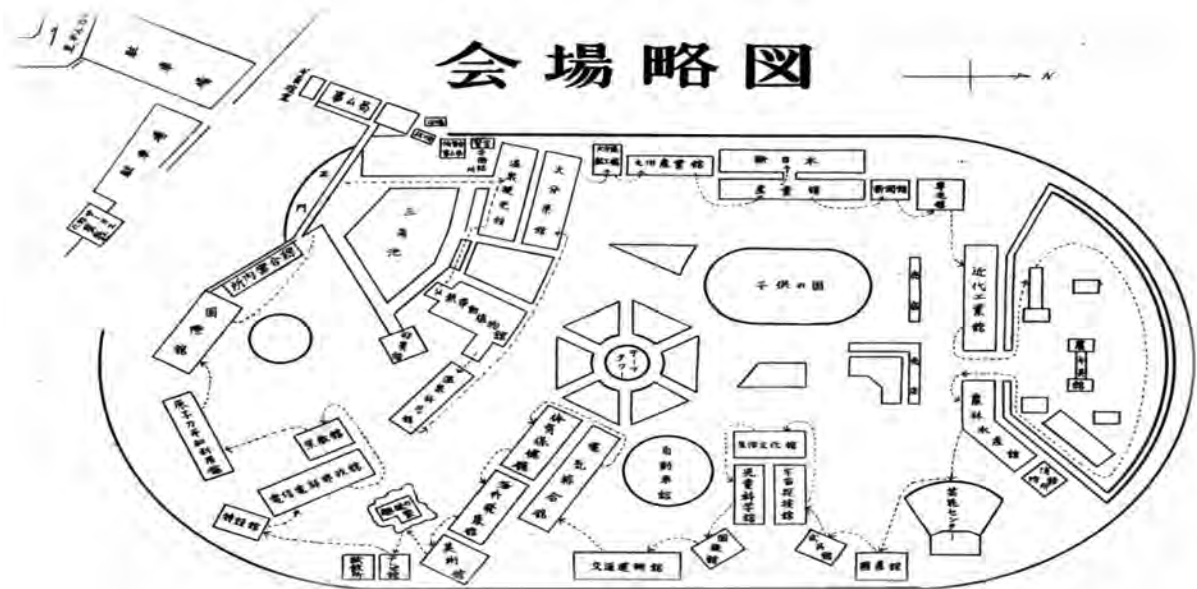


図8.1.8 博覧会会場案内図

博覧会のグランドフィナーレが近づいた5月10日には「別府タワー」の竣工式が行われている。

この頃になると戦前から賑わっていた観光施設も再開されている。「西の宝塚」として戦前から別府温泉郷を代表する観光施設であった鶴見園は、昭和32年米進駐軍の撤収から解除されると遊園地として再開した。惜しくも戦前の目玉であった歌劇団の復活はならなかったが、新たに鶴見園レジャーランドとして、1,200名収容の3階建てのホテルや1,000人が入浴できる大浴場、そして大劇場を次々と建設していった。



写真8.1.17 賑わいの様子① 楠商店街



写真8.1.18 賑わいの様子② 楠銀天街

さらに、広大な庭園は屋外遊戯施設として整備され、モノレール、プール、スリラー館などが造られた。

昭和39年(1964)発行の『新しい日本』(九州(2) 国際情報社)には、別府温泉郷について「昼の別府見物となれば、何をおいても地獄めぐりは欠かせない。行程18.5キロ、バスで約2時間半のコースである。コバルトに澄んだ海地獄は、隣の血の池地獄と対照的な美しさを見せてくれる。スマトラ産やアフリカ産の大小のワニ数10匹が飼育されている鬼山地獄。熱い泥土が坊主頭のようにブクブクふくれる坊主地獄。ミルク色をした白池地獄。2~30分おきに7~8メートルも熱湯を噴き上げる竜巻地獄。そのほか鶴見地獄、かまど地獄、金龍地獄、山地獄を十大地獄というが、いずれも摂氏70~120度の熱湯が湧き、熱気がもうもうと立ちこめて、別府温

泉群の熱源の温泉群の泉源地帯となしている。」と記している。

この頃別府温泉郷には年間600万人もの観光客が押し寄せている。

## 2) 観光施設の開業

1960年代は別府温泉郷各地そしてその近在に新たな観光施設が次々と整備されていった。

昭和4年（1929）に開業し戦前から別府観光を支えてきた「別府遊園地」ことラクテンチは、戦時中は施設を軍に接収されたりしていたが、昭和25年（1950）に現在の「ラクテンチ」として再開を果たした。戦後は動物園、観覧車とともにアヒルレースが人気を呼び、NHK 紅白歌合戦にも登場した。

昭和32年（1957）、別府市と観光業界有志によって高さ約100mの別府テレビ塔が完成した。これは東京タワーの開業から1年早く、当時は名古屋テレビ塔、大阪通天閣に次ぐ3番目のテレビ塔（タワー）として注目を集めた。昭和36年（1961）には「別府タワー」と改称され、観光客や修学旅行生は必ず立ち寄る場所として別府観光のランドマークとして人気を博した。現在でも地上60m（地上17階）からは360度の展望が楽しめる。

別府から由布院に抜ける道沿いには昭和9年（1936）

西暦	昭和・月	開園(業)施設
1950	25・6	別府遊園地、ケーブルラクテンチと改称し開園。タイ国よりインド象を輸入
1957	32・5 ・5	別府テレビ塔(別府タワー)完成 別府水族館開館
1962	37・3  ・4 ・12	ケーブルラクテンチ、リフトを立石山頂まで架設 ザボン園開園 鶴見岳の別府ロープウェー開業
1963	38・8	別府ファミリーランド開園
1964	39・10	九州横断道路開通
1967	42  ・10	スギノイパレス開業 城島モトピアランド開園
1968	43・12	志高ユートピア開業

表8.1.4 高度経済成長期に開園した観光施設  
注)『別府市誌』(2003)より作成

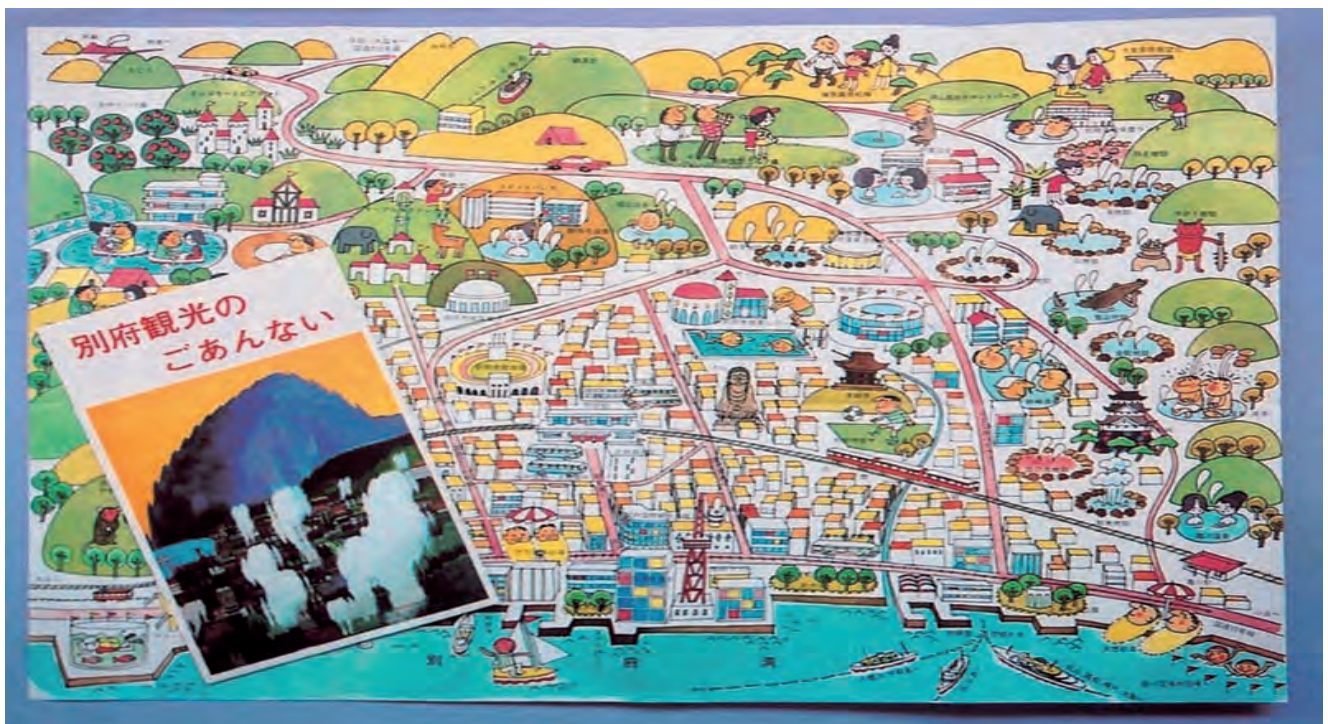


図8.1.9 昭和40年頃の観光パンフレット

に鐘淵紡績の洋綿牧場が開かれていたが、この広大な土地は昭和36年（1961）には関西汽船グループによって買収され観光用地として整備された。翌年には当時全国唯一の観光レジャー専門会社であった後樂園グループ（現東京ドームグループ）の傘下になり「森の遊園地」をコンセプトとした開発が行われた。

昭和37年（1962）には近鉄グループによって鶴見岳にロープウェイが開業した。九州横断道路沿いの標高503m地点に高原駅を設置し、1,296mの山上駅までの高低差792.5mを僅か10分で結ぶという、当時世界最先端の技術を駆使して完成させたという。また、定員110名は当時世界最大を誇った。

別府温泉郷に隣接する大分市の高崎山には江戸時代から野生の猿が生息していたといわれていた。当時の大分市長上田保氏の発案によって、農作物への被害防止と観光開発をねらって猿の餌付けに成功した。そして、昭和28年（1953）に全国初の自然動物公園として開園した。この施設の特徴は、あくまでも猿は飼育せずに集団生活を営む野生の猿として餌付けしている点にある。

この高崎山の麓に昭和39年（1964）、大分生態水族館が開園した。周囲61mの潮流式大回漕や餌付けショー、魚のサーカスなど斬新なアトラクションを取り入れ話題を集めた。昭和46年（1971）マリーンパレスと改称し、タツノオトシゴ、コバンザメ等の稚魚育成に成功するなど生態調査にも力を注いできた。平成16年（2004）には道路拡張による埋立地に新水族館を開設し「うみたまご」として年間100万人以上の集客を誇る観光施設として君臨している。

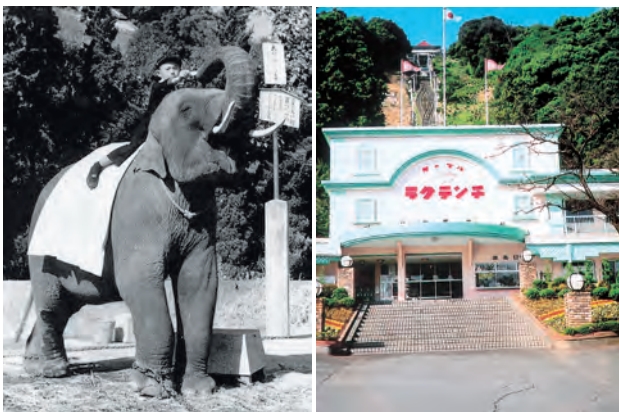


写真8.1.19 ラクテンチ  
戦後間もない頃（左）と近年（右）の正面ゲート



写真8.1.21 鶴見岳ロープウェイ



写真8.1.20 開業間もない頃（1965年頃）の別府タワー



#### (4) 九州横断道路の開通

九州横断道路（以下、横断道路）の構想は昭和初期から語られていたが、戦争のため立ち消えていった。

戦後横断道路の建設が実現に向けて動き出したのは、昭和25年（1950）に大分県から横断道路建設基本計画が認可されたことが始まりといえよう。これによって、1951年には別府・飯田高原（くじゅう高原）間の道路改良工事が着手された。こうして、戦前から構想の持たれていた横断道路建設が正式にスタートを切り、由布岳・鶴見岳が阿蘇国立公園の編入に花を添えたことになり慌ただしさが増していった。

昭和30年（1955）横断道路建設を推進してきた木下郁氏が大分県知事に就任すると、別府市、湯布院町、九重町、久住町が中心となって「九州横断道路建設促進期成同盟」が結成された。

昭和33年（1958）には、全国植樹祭の開催に合わせて国道210号線（別府市・久留米市）の別府・志高湖間の改修工事が進められ、さらに翌年には由布院・水分時間6.6kmの付け替え工事もスタートした。こうして横断道路と連絡する国道の改修工事が進められていった。そして昭和36年（1961）2月、いよいよ横断道路工事は飯田高原から阿蘇へと抜ける道路建設が始まり、いよいよ佳境を迎えた。飯田高原に至るルートは基本的には明治中頃の硫黄運搬路を改良する区間が多かったようであるが、一部では山林を切り開いて造成されている。工事は最大の難所牧の戸峠を越えて熊本県境の瀬の本までの未開地に着手した。

そして遂に着工から3年半後の昭和39年（1964）10月4日横断道路は開通した。

なお、この横断道路は昭和28年（1953）「带状沿線拡張地域」の指定を受け、道路の両側600mが道路公園として整備されることになった。これが我が国最初のパークウェイの誕生である。パークウェイとは道路周辺的美観を整備することによって、一般的な景観に彩りを添える役割を果たすものとしてアメリカで発案されたものである。

しかし、横断道路は国立公園を貫通するという全国的にも観光道路として魅力的な役割を果たす一方で、大分県と熊本を結ぶ産業道路としての役割も期待していたようであった。



写真8. 1. 22 開通直前の横断道路



写真8. 1. 23 開通当時の横断道路

## 4 高度経済成長期以降

### (1) 地獄めぐりの変容

高度経済成長によって国民生活は格段と向上し、自家用車は「一家に一台」が当たり前となった。こうした国民生活の質の変化によって、高度経済成長期後の別府観光も様々な局面で変容していった。

例えば、別府観光の目玉として未だに人気を集めている「地獄巡り」はその影響を最も受けた観光資源（施設）といえよう。

地獄巡りは前述のとおりその開業以来いわば「ガイド付き遊覧バス」とセットで発展してきたといえる。しかし、マイカー時代の到来によってその状況は大きく変化していくことになる。

今日の地獄巡りのコースとなっている各地獄には大規模な駐車場が完備され、週末ともなれば県外ナンバーの車で満杯ということも珍しくはない。さらに今日では、身体障害者にも配慮して誘致に努めている。こうした新しい局面は観光パンフレットにも反映されている。別府地獄組合のパンフレットには「これが真実の地球発見！地球の素顔に出会う旅」というキャッチフレーズが踊っている。これは観光者個人の感性に訴えるフレーズといえまいか。団体旅行者に対しては極論を言えば主催者に訴えかければことは済んでいたともいえる。さらに、ある旅行者の観光目的は地獄巡りではなくとも、そのツアーに地獄巡りが入っていれば否応なしに来てしまうのである。とりわけ、会社・地域の慰安旅行や修学旅行の場合はこの傾向が強い。しかし、個人客が主流を占めると、当然旅行者は「個人の判断」で行先を決定する。

さて、地獄めぐりバスの本元である亀の井バスは、今日でも地獄巡りは運航している。現在このコースはAコース運行しており1日5回運行し、所要時間は2時間20分、運賃は8か所の入場料込で大人3,600円となっている。また、全便七五調の案内を実施している（亀の井バスHPより）。

### (2) テーマパークの登場

1980年代はとりわけテーマパークが全国各地で相次いで開業した時期である。全国的なブームを呼んだのは間違いなく昭和58年（1983）の「東京ディズニーランド」の開園とその大成功にある。同年には長崎県に現在のハウステンボスの前身となる「長崎オランダ村」も開園した。その後全国各地にテーマパークが開業し1990年代初めまでにおよそ80か所を数えた。

このテーマパークに先立って注目を集めたのが「サファリパーク」であった。これはいわゆる動物を生態展示（放し飼い）し、専用のバスもしくは自家用車でこれを見学するものである。こうした施設の誕生もマイカー時代の到来の賜物といえよう。

別府温泉郷近郊には昭和51年（1976）に安心院町（現宇佐市）に「九州自然動物公園アフリカンサファリ」が開園している。これは約6kmの専用道路を専用バスあるいは自家用車で巡り動物たちを観察するものである。

さて、別府温泉郷の近在には平成3年（1991）日出町に「ハーモニーランド」が開園している。これはキティちゃんでおなじみのサンリオキャラクターのテーマパークである。

これらの施設は広大な面積を必要とするもので、バスか自家用車での来場が基本である。こうした性格の観光施設の登場はこの時期になって初めて開業し、いよいよ別府観光もマイカー時代に対応する時期が到来したのであった。

これによって九州横断道路も観光バス主体の観光道路からマイカー主体の個人旅行の利用者が増加していくことになる。その結果、個人に対してアピールできるビジネスチャンスの到来と捉える業者も多く、由布院温泉や飯田高原では横断道路沿いに観光施設が増加していったのである。

### (3) バブル経済とその崩壊

1980年代後半にはいわゆるバブル経済の嵐が吹き荒れ1993年頃まで続いた。バブル経済の直接の引き金は1985年の「プラザ合意」による先進諸国のドル安協調路線の確認である。これによって急激な円高が進み、円高不況に対処するために低金利政策を施した結果、不動産や株式への投機が加速したためである。この円高によって海外旅行は一気にブームとなった。

また、昭和63年（1988）には「総合保養地整備法」いわゆるリゾート法の制定とともに全国各地でリゾート開発と銘打った大規模開発が始まった。しかし、この政策は折しもバブル経済の「カネ余り」現象と相まったため、地方ではリゾート開発によってそのお金を呼び寄せようと各自治体は競って大型開発に着手した。大分県においても1989年「別府くじゅうリゾート」が承認されリゾート開発の計画が持ち上がった。

しかし、1993年頃からバブル経済は破綻し各地の大型リゾート計画は頓挫した。とりわけ早々と施設を完成させ華々しく開業した宮崎県の「オーシャンドーム」の破たんは象徴的であった。その他施設建設途中で破綻し「ガレキの山」だけが残った所もあったが、大分県の場合はそこまで行きつかなかった。

しかし、バブル経済崩壊による不況は観光業界全体に激震を起こした。別府温泉郷もその影響を受けたといわざるを得ない。老舗を含む旅館の廃業、企業等の保養所の撤退が相次いだ。旅館の跡地は駐車場やコンビニエンスストアができ、保養所の跡地には「ミニ宅地開発」が進められた所も多く、別府市街地の景観までもが大きく変化してしまった。景観面からいえば、維持が困難となり他者の手に渡った旧家の別荘地も広大な土地とともに屋敷・庭園も取り壊され、商業施設等になっていった。

他方では、1960年代には年間1億人以上もの観光客が訪れた全国の国立公園をはじめとした自然公園もかつての賑わいは薄れている。今や登山やハイキングは中高年で持っているという状況である。レジャーの多様化と海外の自然公園(世界自然遺産)への関心の高まりもあり、別府近在では神楽女湖、志高湖などは閑散としている。



写真8.1.24 志高湖



写真8.1.25 神楽女湖

## 5 今日の動き

### (1) 鉄輪の再整備

事業名	期間
鉄輪蒸し湯温泉整備事業	H17
観光交流センター整備事業	H17
街灯整備事業	H17～21
市道美装化整備事業	H17～21
情報板整備事業	H17～21
PR戦略事業	H17～21
温泉管共同BOX	H17～21
湯けむり景観まちづくり計画策定	H18
温泉遺産の復活事業	H18
モニュメント整備事業	H18～19
鉄輪温泉ポケットパーク整備事業	H18～19
大谷公園整備事業	H18～19

表8.1.5 鉄輪地区都市再整備事業の概要  
注) 別府市資料より筆者作成

事業費	事業内容
7億6,000万円	市道美装化整備事業2,330m (道路石畳整備)、 公園1か所、ポケットパーク3か所、 観光交流センター 街路灯83か所、情報版24か所、モ ニュメント1か所 駐車場20台分
2億600万円	蒸し湯温泉、温泉管共同BOX1,500m、 景観計画策定 温泉遺産の復活2か所、宣伝PR

表8.1.6 鉄輪地区都市再整備事業の区分  
注) 別府市および国土交通省資料により筆者作成

蒸し湯のリニューアルを柱とした鉄輪温泉の地域整備事業(以下、当事業)は、国土交通省「まちづくり交付金事業」(以下、まち交事業)を活用している。まち交事業は「地域の歴史・文化・自然環境等の特性を活かした地域主導の個性あふれるまちづくりを実施し、全国の都市の再生を効率的に推進することにより、地域住民の生活の質向上と地域経済・社会の活性化を図る」ことを目的として創設された。その事業適用範囲は広く、自治体が設定した都市再整備計画に基づいて、道路・公園・下水道・河川の整備から地域交流施設整備、優良住宅整備、土地区画整理そして鉄輪温泉にみる市街地再整備にまで及ぶ。

平成16年度の創設から現在までに全国662市町村1,100地区で事業化され、平成19年度の事業規模は6,115億円にのぼる。当事業を取り込んでいる事例をみると、中心市街地の活性化を目的としたものが多数を占めるが、各地の温泉地域においても洞爺湖温泉、鬼怒川温泉、下呂温泉、草津温泉、鹿教湯温泉などでこの事業を活用している。

鉄輪温泉におけるまち交事業は、別府市が実施を計画していた「鉄輪地区都市再整備事業」に基づいて行われている。この都市再整備計画は「ふれあいと情緒ある温泉街の賑わいを再生し、うるおいに満ちた湯けむりたなびく交流型観光地の創造」を目的として平成17年度からの5年計画で、総事業費はおよそ9億6,000万円である(表9.1.5)。

事業は「基幹事業」と「提案事業」に区分され、前者は道路、公園、生活基盤整備などの地域の社会資本整備事業を指す。後者はまちづくり、観光交流などの地域の特性に見合った事業ならびにその事業調査・研究、推進

事業などに関する事業である。鉄輪温泉における事業区分をみると、提案事業としてメインといえる蒸し湯リニューアル事業が盛り込まれている(表9.1.6、写真9.1.27)。

蒸し湯リニューアル事業費は1億9,720万円で、新築となった蒸し湯は木造一部鉄筋コンクリート造りで、旧蒸し湯と比べると外観は大きく変貌している。延べ床面積は2.3倍、蒸し風呂部分(石室)は男女別各10㎡で、これは旧蒸し湯の男女共用9㎡の2倍の広さとなっている。さらに、休憩施設も整備され旧蒸し湯とは外見とともに機能面においても大きく変貌を遂げている(表9.1.7)。管理体制もこれまでの外郭団体への委託から、地元の鉄輪共栄会が指定管理者となり、地元による運営が実現した。2階部分には観光交流センターが設けられ、専属の担当者が常駐している。

区分	旧蒸し湯	新蒸し湯
建築年	1970(昭和45)年11月	2006(平成18)年8月
構造	鉄筋コンクリート造	木造一部鉄筋 コンクリート造
述べ床面積	122.76 m <sup>2</sup>	285.30 m <sup>2</sup>
石室の形態	男女共用(約9 m <sup>2</sup> )	男女別 (各約10 m <sup>2</sup> )
管理者	(財)別府市総合振興 センター 管理委託者	鉄輪温泉共栄会 指定管理者

表8.1.7 新旧蒸し湯の比較  
注) 別府市資料より筆者作成

当事業は蒸し湯のリニューアル事業の他に、市道美化整備事業としてメイン通りともいえる「いでゆ坂」と「みゆき坂」を石畳の舗装に付け替えている。これにより鉄輪温泉のイメージはかなり変わったと思われる。また、温泉遺産の復活事業として地元住民によって使われていた洗濯場ならびに熱の湯温泉源泉跡の復元がなされた。こうしたメイン工事はほぼ完了し、今後は街路灯、駐車場、ポケットパーク等の整備が行われる予定である。

さて、鉄輪地区始まって以来の大規模な地域整備事業であるが、鉄輪地区全体の動向とすれば、当事業に対しては積極的に推進する方向で動いてきたといえよう。地域整備事業決定の報を受けた地域社会は、平成16年(2006)11月には自治会・旅館組合・商工会・NPO法人などの代表による「受入協議会」を発足させ、事業に対する地元の要望をまとめていった。このような地域社会の対応も評価され「第2回まち交大賞全国大会」において、銀賞に相当する「創意工夫大賞」を受賞した。この賞はモデル性の高い創意工夫のある取り組みをしている地区を表彰するもので、鉄輪温泉の当事業のプログラムは、今後全国の温泉地域再生のモデルとみなされるであろう。

鉄輪温泉に新たな観光施設新たな施設「鉄輪まちおこしセンター」が平成22年(2010)3月に登場する。この施設の名称は公募で『地獄蒸し工房鉄輪』と決定された。



写真8.1.26 旧蒸し湯



写真8.1.27 新蒸し湯



写真8.1.28 現在の鉄輪界限



図8.1.10 鉄輪まちづくりセンター予定図

施設は共同浴場の「上人の湯」に隣接する場所に建設されている。木造2階建ての1階部分には地獄蒸し料理の体験施設も設けられる。このコーナーには15基程度の蒸し釜を設置する予定である。調理器具・食器は貸し出す予定という。また、食材は利用者が自由に持ち込めるようにする。

その他に鉄輪の歴史や温泉に関する展示コーナーと地域からの情報発信をするコーナーも設けられる。

建物の外には車いすのままでも入浴できる「足湯」と「足蒸し湯」の設置も予定されている。

## (2) 観光まちづくり組織

### ① ボランティアガイド

今日別府温泉郷は「別府八湯」と称して、古くから由来のある8か所の温泉地をアピールしている。これは今日ではすっかり定着した感があるが、八湯の提唱はそれほど古いことではない。

ことの始まりは、平成8年（1996）8月8日8時8分8秒に観光産業研究会が中心となって「別府八湯勝手に独立宣言」を行ったことからである。ここで、市内8か所の個性的な温泉地の特徴や個性を活かして活性化を図ろうとする動きが本格化した。これに端を発して竹瓦倶楽部・鉄輪愛耐会などの住民組織が各地で結成されていった。

中でも1998年に組織された竹瓦倶楽部はボランティアガイドによる街歩きツアーを始めた。当初は自分たちの住む街を知ることから始まったのであるが、回を重ねていくうちに知識と経験も積み1999年には毎月第2・4日

コース名	実施日	時間	費用
竹瓦かいわい路地裏散歩	月・水・金・日	2.5	700
竹瓦かいわい路地裏散歩 竹瓦倶楽部版	毎月第2・4日	3	700
竹瓦ゆうぐれ散歩	毎日	1	500
竹瓦夜の路地裏散歩	毎月第2・4金	1.5	1,000
浜脇温泉・セピア色散歩	日	2.5	700
山の手レトロ散歩	日	2.5	1,500
鉄輪湯けむり散歩	第3日	2.5	700
鉄輪温泉ゆうぐれ散歩	土・日	1	500
人情の町亀川湯遊散歩	第1日	2	900
堀田湯の里・湯けむり散歩	第2日	2	700
ふれあいウォーク	第2土	2	700
朝見郷・ロマン散歩	第3日	2	700
メモリアル号で行く 別府湾海の散歩	要予約	1	2,000

表8.1.8 別府八湯ウォーク一覧（2009年）  
注）『別府八湯温泉本』2009～2010年版より作成

曜日の開催を定例化した。こうした動きは町内を活性化させ、やがて別府八湯ウォークとして市内各地のボランティアガイドツアーへと発展していくことになる。

ボランティアガイドツアーはその後「鉄輪湯けむり散歩」「山の手レトロ散歩」「浜脇温泉・セピア色散歩」「竹瓦ゆうぐれ路地裏散歩」といったツアーが生まれ、今日では市内で13コースが組まれている。

ボランティアガイドツアーが盛んに催行されるようになると、ガイドの育成と人材確保を求める声も高まった。これを受けて別府市は平成13年（2001）にガイドの資質向上と人材育成を目的として「観光ガイド養成講座」を始めた。この養成講座をきっかけに自らガイドを買って出る市民も現れ、受講者の有志の間に「語り部の会」が誕生した。会員たちは手始めに「竹瓦かいわい路地裏散歩」を竹瓦倶楽部から受け継ぐ形で実施した。その後会員たちは市内各地のツアーに参加している。

「語り部の会」の会員は40歳代から70歳代が中心となって活動している。また、市内の大学に通う留学生も参加していたことがある。会員たちは受け持ちのツアーの前

には自らの手で最新情報や歴史的な背景を確認している。その確認作業によって新しい発見ができることに喜びを感じているという会員も多い。また、自ら発掘した場所を案内し、参加者に喜んでもらう時にやりがいを感じているようだ。会員たちはガイドへの参加によって交友関係が広がるとともに地元へ愛着と誇りを持つことができたと同様に感じている。

## ②オンパク

現在別府温泉郷におけるまちづくり活動の中心は「別府八湯温泉泊覧会（以下、オンパク）」である。オンパクは2001年に第1回目を開催した。なお、オンパクの泊覧会は『泊』という字をあてている。これは言うまでもなく宿泊客の増加の願いを込めたものである。オンパクの主催団体は別府市旅館ホテル組合連合会が中心となって組織された実行委員会である。

オンパクの趣旨は、別府八湯地域において温泉を核としたウェルネス産業を起こすことにある。そして、オンパクを通して以下の3点の実現を目指している。

- 1) 地域の資源（温泉、自然環境、町並み、人材など）を活かした多彩なプログラムの提供を通じて、各種のサービス産業が成長すること。
- 2) オンパクに参加する事で住民が健康で前向きな暮らし（ウェルネスライフ）を送る事ができ、生活の質（QOL）の向上につながる事
- 3) 旅行者がオンパクに参加し、各種の体験や交流の機会を得る事で別府八湯のファンになっていただき、リピート化や長期滞在化を実現すること。

また、別府ウェルネス産業育成のため、ウェルネスコンソーシアムを組織し、オンパクの取組みにおける経験や開発したITシステムを活用して他の地域における同様の取り組みに対して積極的にサポートもしてゆき、地域それぞれの特性を活かした地産地消・地場産業育成型の健康・集客・交流サービス 産業の創出のサポート体制を整えている。

## ③湯路・温泉カルテ

平成15年（2003）の春、別府八湯アチチ探検隊によって地域通路「湯路」が考案された。この別府八湯アチチ探検隊は中心街に点在するおよそ20か所の共同湯の利用促進を目的に作られた任意団体で、この「湯路」も中心市街地の商業の活性化および共同湯の利用促進をかねた目的である。この年の8月に行われた中心市街地でのイベントの際には、2,000枚近い「湯路」が配布され、100店を超える地域の商店が「湯路」を受け入れ、その名は広まることになった。また、地域住民ばかりか別府を訪れる観光客、地域の商店、学生、そして共同湯という別府独特の施設をつなぐメディアとして機能している。さらに、路地裏散歩の参加者にも配布されており、参加者がそれを街中で利用するところまで来ている。平成16年（2004）の春からは、旅行エージェントが湯路を買い取り、観光客に配布する事業も始まった。そして、宿泊した観光客の30%程度が「湯路」を持って入浴をするため町に出かけるという状況も生まれている。一方、昨今の温泉ブームによって観光客の温泉に対する見方も厳しさを増している。この背景には全国で露呈された温泉表示の不正・偽装がある。別府温泉郷では、このような問題が表面化する以前から「温泉カルテ」と呼ばれる独自の温泉表示制度を設けてきた。不祥事による温泉不信が広まった時においてこの制度は大きな力を発揮し、別府温泉郷の温泉に対する自己管理の高さを示すこととなった。

## ④八湯トラスト

別府八湯トラストは、主として別府八湯の自然環境の保護および歴史的な温泉文化を有する建造物などの保存

および利活用に関する各種活動を行い、別府八湯の町づくりに貢献することを目的として平成14年秋に設立された。

八湯トラストは次の事業や活動を行う。

- 1) 歴史的な建造物などを復元、修復、保存する為の基金事業。
- 2) 町歩きや情報発信などを通じて歴史的な 建造物保存の意識を高める為の啓蒙活動。
- 3) 歴史的な建造物などの維持管理や活用を行う事業。
- 4) 町並みや景観を美しく保つ為の各種活動。
- 5) 環境を保全し、美しく保つ為の各種活動。

別府八湯トラスト活動は、行政が困難な事例および物件を対象に、住民が自ら参加し行政と協働の下で積極的な対象物件の保存および利活用を行っていこうという運動である。平成16年9月には、NPO 法人別府八湯トラストとなり、本格的な会員募集、基金の充実が始まった。また、啓蒙的活動として、別府周辺地域の自然環境の保全を目的としたエコツーリズムの活動「別府湾地球学校」が大分県のNPO パートナー事業として採択されている。



## 第2節 観光客の推移

### 1 黎明期の観光客の推移

別府温泉郷における観光客数の記録は、大分県が明治18年（1885）にその概要を作成している。この内容は資料公表のおよそ10年前の明治10年頃の実態を示したものとされている。また、調査は市内の各温泉浴場の入浴者を対象としている。また、この資料では地元住民の入浴に対しては『土人入浴』と記し区分している。したがって、この数値が当時の観光客数に一番近いものといえる。

資料によると、明治10年頃の年間の地元住民以外の入浴は11浴場で記録され、その総計は22,400人とされている。最も多かったのは、浜脇村の泥湯で「6,000人以上」と記されている。次いで、別府村の楠湯で「6,000人以下」、さらに鉄輪村の蒸風呂が「3,000人以上」と続く。また、旅館（記録では「逆旅」）数は134軒であった。

これをみると、旅館（逆旅）1軒あたりの宿泊者は、浜脇村は200人以上、南立石村堀田温泉200人、野田村赤湯150人、別府村150人以下、鶴見村明礬湯100人と続いていた。一方、鉄輪村は88人に留まり、農業との兼業で季節性の湯治客を細々と受け入れていたようである。

観光客（入浴客）の数は明治末の記録をみると、明治初期と比べると飛躍的に増加している。残されている記録は浜脇村と別府村のみであるが、明治44年（1910）当時の年間入浴者数は、別府村298,000人、浜脇村は163,000人を示している。

これをみると、旅館1軒あたりの年間宿泊者数は別府村のおよそ2千人に対して、浜脇村はその倍の4千人に上っていた。また、年間5千人以上の旅館は別府村僅か11軒（0.07%）に対して、浜脇村は15軒（38.5%）を占め、これらの旅館への宿泊者数の割合は別府村31.9%に対して、浜脇村は75.6%に上っていた。

このように黎明期の別府温泉郷は観光客（入浴者）数では別府温泉が他を大きく上回っていたが、旅館の経営規模でみると浜脇村が他を圧倒していたといえよう。

明治年間の僅か30年の間で別府温泉郷を訪れた観光客（入浴者）は劇的な増加をみせた。この要因は前節で述べた通り、人口掘削による泉源の急増とそれに伴う浴場ならびに旅館の増加といえる。また、明治初期から大分県が浴場の整備に力を注いだことも大きな要因といえる。

村名	温泉	浴場	入浴者数	旅館数
野田	赤湯	1	300	2
	蒸湯	2	300	
亀川	湯耶泉	1	300	8
	四ノ湯	2	500	
鉄輪	蒸風呂		3,000以上	34
鶴見	明礬湯	1	1,000	10
別府	楠湯	3	6,000以下	40
浜脇	泥湯	2	6,000以上	30
南立石	堀田湯	1	2,000	10
	上田湯		1,500	
	観海寺湯	1	1,500	
合計		14	22,400	134

表8.2.1 明治初期における観光の状況（1877年）

注）大分県（1885）および浦（2006）より作成。ここでは外部入浴者数の記録がある浴場のみ記載。空欄は記載なし。

	別府村		浜脇村	
	客数	旅館数	客数	旅館数
1万～	45,000 15.1%	3	48,000 29.6%	4
5,000人～	5,000 16.8%	8	75,000 46.0%	11
1,000人～	183,000 51.4%	87	37,000 22.4%	17
～1,000人	23,000 6.8%	51	3,000 2.0%	7
	298,000	149	163,000	39

表8.2.2 明治末における別府・浜脇温泉の状況（1910年）

注）山村（1981a）より作成

## 2 展開期の観光客

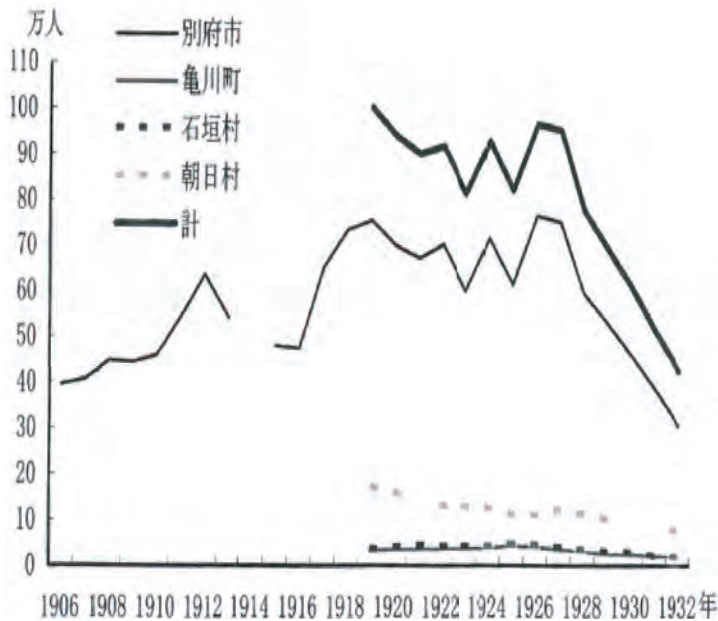


図8.2.1 市町村別入浴客数

注) 浦 (2006) 48ページより抜粋

明治末には別府村および浜脇村だけでも年間46万人もの観光客(外来入浴客)を数えるまでになった別府温泉郷であるが、大正8年(1919)には別府温泉郷全体の年間入浴客数は100万人を突破した。その内訳をみると、別府市(旧別府村・浜脇村)が75万5,000人、朝日村(鉄輪・明礬温泉)17万4,000人、亀川町(亀川・柴石温泉)3万3,000人、石垣村(堀田・観海寺温泉)3万8,000人を示している。

当時の観光客の季節別動向をみると、別府温泉と浜脇温泉は4月から6月がオンシーズンで、5月にピークを示している。一方、鉄輪温泉と明礬温泉は3月から5月がオンシーズンで、4月がピークを示している。これは、別府温泉・浜脇温泉は行楽色が強く、鉄輪温泉・明礬温泉は農閑期の湯治客が多かったものと思われる。

それにしても、明治末から僅か10年ほどの間で、別府温泉・浜脇温泉の観光客数は1.6倍に増加していることになる。恐らく他の温泉はこれ以上の伸びを示したとも予測できよう。こうして別府温泉郷は明治維新からわずか半世紀で100万人の観光客を迎え入れる名実ともに我が国を代表する大観光地としての地位を確立したのであった。

一方、明治以降各地の温泉地を対象とした入浴者数の全国調査が行われている。以下、この結果をもとにみていきたい。

こうした調査の最初は、明治16年(1886)に刊行された『日本鉱泉誌』に掲載されたものと思われる。これは明治10年頃の調査結果をまとめたものといわれている。これによると、別府温泉郷関連では「別府・浜脇温泉」が2万1,970人で全国26位にある。この調査では全国1位は愛媛県の道後温泉で72万1,712人を示し、2位の佐賀県武雄温泉(当時柄崎温泉)の29万400人を大きく引き離している。別府温泉郷の全国的な位置づけを考えると、この頃はまだ一地方の湯治場と言えたのではないか。

次いで、大正12年(1923)に発表された『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』も大正10年頃の全国調査結果を実施している。これによると別府温泉郷は、「別府」として記載され、入浴者数は77万8,799人を示し全国3位にランクされている。ここでも全国1位は道後温泉で103万237人と記録されている。次いで2位は兵庫県の城崎温泉で100万7,175人となっている。『日本鉱泉誌』では全国2位にランクされていた武雄温泉は5位(43万3,371人)となっている。

さらに、昭和16年(1941)に発行された『日本温泉大鑑』は、全国の温泉地の入浴者数を月別に記載している。その統計データの取り方の統一性には疑問の余地も残るが、全国的な温泉行楽の実情を示す資料としてその利用価値は高いといえよう。

さて、これによると昭和14年(1939)における別府温泉郷の入浴客数は101万1,339人と記されている。九州では山鹿温泉の228万2,854人に次ぐものである。しかし、山鹿温泉のデータに関してはいわゆる地元住民の日常的な利用もその数に入れてあるとの指摘もなされている。

この『日本温泉大鑑』は月別の入浴者数も記載されている。全国的な動向をみると、多くの温泉地において入

浴客の利用のピークは4月から6月、あるいは8月を示しており、その2グループに大きく区分できそうである。別府温泉を見ると4月から6月を示している。全国的な傾向については詳細な分析と考察をまたなければならないが、大まかな傾向をみると、8月にピークを示している温泉地は、兵庫県有馬温泉、群馬県草津温泉と四萬(万)温泉、神奈川県湯河原温泉、栃木県那須温泉などで、何れも大都市に近在する温泉地である。

一方、全国的には多くの温泉地は4月から6月に来客のピークを迎えている。別府温泉郷は、当時大都市住民を市場とした行楽色の強い温泉地グループではなく、湯治場機能を母体としたいわゆる一般的な温泉地のグループに属していたことになる。

しかし、別府温泉郷は大正から昭和にかけて地獄の遊園地化をはじめとして次々と観光施設が整備されていったのである。形の上では湯治を中心とした保養型の温泉地から、観光施設の利用を主体とした行楽温泉地へと変貌を遂げていったのであるが、入浴客の動向からみると大都市近在の行楽型温泉地とは異なる傾向を示していたということになる。

他方、第1次世界大戦終結後、我が国は観光事業を国策の一環として展開することになった。別府温泉郷は外国人観光客の日本周遊ルートに位置づけられた。しかし、外国船の別府港への入港は、こうした国策が展開されるかなり前の明治42年(1909)のオーストリア軍艦カイゼリン号であった。恐らくこうした実績から周遊ルートに編成されたとも言えよう。

大型客船の入港は昭和元年(1926)のカナダ観光船エンプレス・オブ・スコットランド号(3,500トン)から本格的になる。同年にはイギリスのフランニア号も入港し、同船は翌々年にも来航を遂げている。昭和3年(1928)にはエンプレス・オブ・オーストラリア号が寄港し、同船はこれ以後、昭和5年、同6年にも寄港している。このような相次ぐ大型観光船の来航は、大型船の造船技術の確立と世界的な観光ブームによるもので、有名なタイタニック号やポセイドン号もその流れにあるといえよう。

こうした中、外国の要人・著名人の来別も相次いだ。昭和元年(1926)には当時のフランス在駐大使、昭和9年(1934)にはニューヨーク市長が訪問している。さらに、昭和10年(1935)にはチャーリー・チャップリン氏とバーナード・ショウ氏が訪問している。翌年にはやヘレン・ケラー女史も来別している。

昭和10年(1935)当時の外国人の旅館利用者は6,500人を数えている。また、同年の交通機関の利用状況をみると別府駅の降車客数は58万8,000人、別府港への上陸者数は20万人を超え、1921年の17万9,000人、6万2,000人を大きく上回っている(浦、2006)。

西暦(昭和)	来航客船名
1926(1)	エンプレス・オブ・スコットランド号 フランニア号
1928(3)	フランニア号
1930(5)	エンプレス・オブ・オーストラリア号 エンプレス・オブ・オーストラリア号 レゾリュート号
1931(6)	エンプレス・オブ・オーストラリア号 レゾリュート号
1932(7)	エンプレス・オブ・ブリテン号
1933(8)	エンプレス・オブ・ブリテン号
1935(10)	エンプレス・オブ・ブリテン号
1936(11)	エンプレス・オブ・ブリテン号
1938(13)	モンテクツコリ号

表8.2.3 昭和初期の外来船来航の状況  
注)【別府市誌】(2003)より作成。

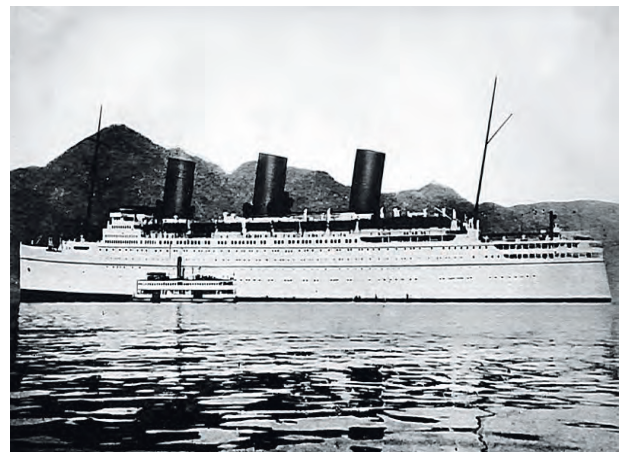


写真8.2.1 外国船

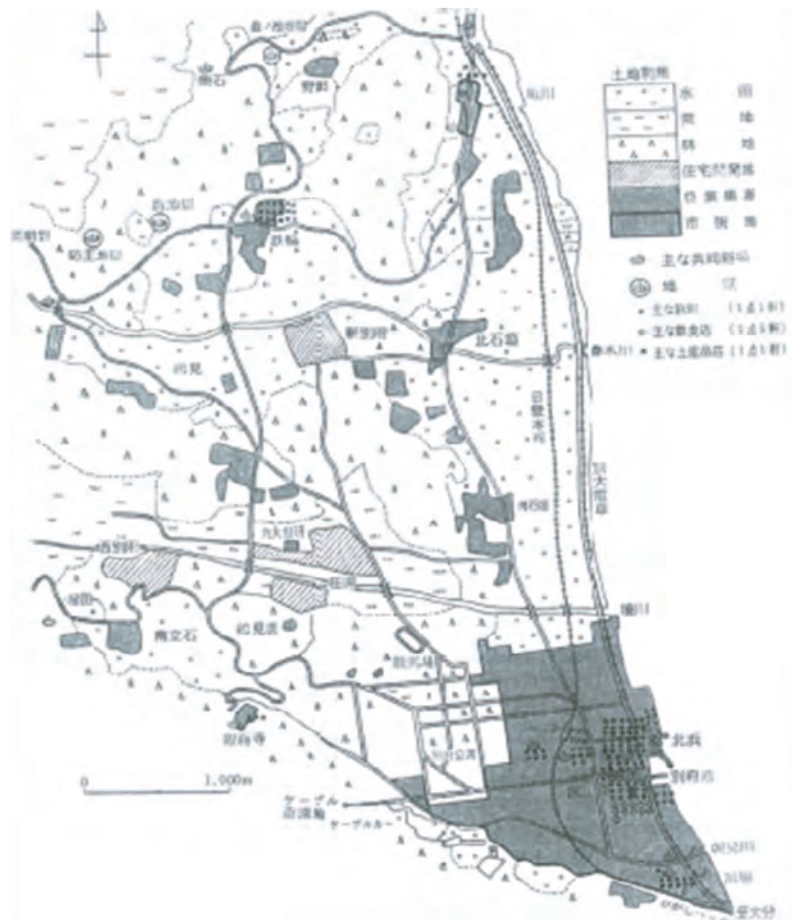


図8.2.2 昭和初期の観光産業の分布  
 注) 浦 (2006) 46ページより抜粋

### 3 高度経済成長期の観光客

第2次世界大戦の敗戦は国土を焦土と化したばかりか、人々の心にも大きな傷を与えた。こうした中、戦災を受けなかった別府市は官民を挙げて大きな傷を負った全国民に保養と行楽の場を提供すべく動きが始まった。この動きは、昭和20年代の別府温泉郷が国際温泉観光都市として発展すべき法体制の整備に表れている。

また、昭和32年（1957）3月に開催された「別府温泉観光産業大博覧会」は5月までの62日間で60万人もの入場者を集めた。この年の別府の観光客数は252万人を数えた。

観光客数は、高度経済成長が始まった昭和36年（1961）には500万人を突破した。さらに、昭和40年（1965）には700万人に達し、高度経済成長の全盛期に当たる昭和43年（1968）には1,000万人に達した。このように観光客数は1957年から1968年の僅か11年間で4倍増加したことになる。とりわけ、1961年の500万人突破から7年で倍増している。単純に計算しても観光客数は毎年70万～80万人増加していたことになる。

観光客の増加は、昭和48年（1973）からはじまった「オイルショック」時においても増加の伸びは鈍ったものの減少を示すこともなかった。

観光客数の伸びはオイルショック後すぐに回復し、昭和51年（1976）には1,300万人に達し、歴代の中でもピークに達した。この年には「アフリカンサファリ」が開園し、まさしく別府観光の絶頂期ともいえる時期であったといえよう。

これまでみてきた観光客数の激増を支えてきたのは宿泊施設数の増加と規模拡大であった。昭和26年（1951）当時の別府温泉郷の旅館数は265軒で収容人数は1万人を超えていた。その内194軒（73.2%）は別府温泉および浜脇温泉が占めていた。その他の宿泊施設としては貸間がおよそ100軒、保養所が34軒であった。

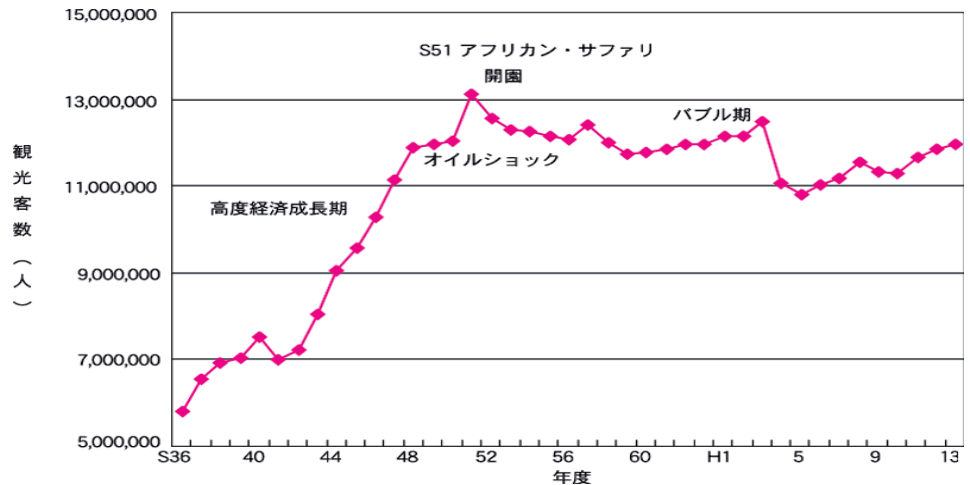


図8.2.3 観光客推移

戦後の旅館経営者の中には引揚者が参入したケースも多くみられた。また、戦時下まで市内に点在していた主に大陸で財をなした資産家の別荘が旅館に転用されたことは別府温泉郷の大きな特色といえよう。

旅館数は昭和36年（1961）には618軒を数えた。その内訳をみると、別府温泉・浜脇温泉が449軒、鉄輪温泉・明礬温泉が111軒、亀川温泉37軒、観海寺温泉21軒と続いていた。貸間は96軒で、内訳をみると約半数の46軒は鉄輪温泉・明礬温泉が占めていた。保養所は88軒あり、内50軒は市街地に点在していた。

昭和42年（1967）になると、宿泊施設数は939軒に達し、最大収容人員も2万8,466人となった。この僅か6年間で宿泊施設は300軒以上増えている。これも、単純計算すると1年間でおおよそ50もの宿泊施設が増加していたことになる。正しく驚異的な数値である。このような宿泊施設そのものの増加とともに、各旅館の大型化・高層化も急速に進んでいった。

旅館の大型化・高層化は昭和35年（1960）のホテル清風が6階建ての新館33室の増設を皮切りとして正しくブームとも呼べる状況となった。

さらに、昭和39年（1964）に全通した九州横断道路は、鉄輪温泉では道路沿いへの旅館進出を促し、別府温泉郷の旅館立地に大きな影響をもたらした。

また、昭和35年（1960）の別府国際観光港の開港と昭和42年（1967）の関西汽船の移転によって、流川通りで開業していた旅館数件が廃業を余儀なくされている。

西暦	昭和	旅館名	内容
1960年	35年	ホテル清風	新館6階
1961	36	杉乃井ホテル	新館6階
1962	37	日名子ホテル	新館6階
1963	38	白雲荘	本館9階
1965	40	杉乃井ホテル	新館12階
1966	41	杉乃井ホテル	スギノイパレス
1971	46	杉乃井ホテル	13階

表8.2.4 高度経済成長期における旅館の大型化・高層化  
注) 浦（2006）より作成。

西暦	昭和	旅館名
1964	39	神和苑
		鬼山ホテル
1966	41	石松荘
		大石荘
		日本旅館なるみ
1968	43	ホテル児玉

表8.2.5 九州横断道路沿いに進出した宿泊施設  
注) 浦（2006）より作成。



図8.2.4 旅館の立地移動  
 注) 浦 (2006) 63ページより抜粋

#### 4 高度経済成長期以降の観光客

別府温泉郷の年間観光客数は昭和51年（1976）1,312万人をピークに減少に転じ、以降1980年代後半まで1,200万人前後で推移した。この10%に及ばない減少率は、海外旅行の一般化およびテーマパークの展開といったこの時期の観光を巡る潮流を鑑みた場合、全国の温泉観光地と比べると健闘しているとも受け止められよう。しかし、年間100万人以上の観光客の減少は様々な影を投げかけたことも事実である。

昭和51年（1976）の鶴見園レジャーセンターの閉園は、昭和初期の開業以来別府観光を支えてきた観光施設ただけに一つの時代の終わりを象徴するものであった。突然のオイルショックの影響の深刻さを物語るものでもあった。

オイルショックの影響によって、名門旅館を含む多くの旅館も廃業・倒産の憂き目にあっている。

経済がオイルショックから立ち直る、いわゆる高度経済成長以降は前述のサファリパークの開園のように郊外に新たな観光施設も開業している。このサファリパークは115万 km<sup>2</sup>という広大な敷地を有している。平成3年（1991）には近接する日出町に「ハーモニーランド」が開園した。

これらの施設は、同類のいわゆる「テーマパーク」が全国的に人気を呼んだ時期にあたり、全国的なトレンドの観光施設が別府近郊にも必ず設置されたということは、別府温泉郷の持つ集客力に依存していることを物語るものといえよう。加えて、1980年代末から1990年代前半に全国各地で開業したテーマパークの多くはバブル経済崩壊とともに閉園に追い込まれたのであったが、一時の勢いはないものの別府近在に立地するテーマパークは未だ健在であるということも、別府温泉郷の集客力を物語るものといえよう。

昭和63年（1988）のリゾート法の制定とともに全国各地でリゾート開発と銘打った大規模開発が始まった。大

分県においては翌年「別府くじゅうリゾート」が承認されリゾート開発の計画が持ち上がった。しかし、平成5年（1993）ころからバブル経済は破綻し、全国のリゾート開発計画はその大部分は頓挫した。

このバブルの崩壊によって日本経済は構造的な打撃を受けた。別府温泉郷への観光客数も1,250万人から1,000万人台へと一気に200万人も減少するというかつてない落ち込みを示した。

その一方で、1990年代半ば以降我が国の観光を巡る新しい動きが出てきている。

1990年代中頃からは、国内外旅行の主流は個人旅行に移り、今やこの旅行形態が定番となりつつある。別府温泉郷もこの潮流に置かれ、団体旅行客の対応からシフトの遅れた旅館・ホテルはこれ以降苦境に立たされ、廃業に追い込まれた処も数多い。こうした事態は1960年代末には年間200万人以上の児童・生徒を修学旅行生として迎えていたが、今日ではその数は1万人台に過ぎない。つい最近までグループ別自由行動で鉄輪界隈を歩いていた修学旅行生を見かけていたのだが、最近ではほとんど見かけることはない。

今日別府温泉郷を訪れる観光客の大半は個人・グループ旅行である。そのため、地獄めぐりの入場券は共通券よりも個別の入場券の方が売れているという。また、大規模ホテル・旅館よりも20室以下の中小規模の旅館の人气が高い。

このため、現在ではもともと中小規模の旅館が集積していた鉄輪温泉や明礬温泉の旅館の中には、今日の宿泊客が好む和風の離れ形式あるいは部屋別に露天風呂などを設置するなどの工夫を凝らしている旅館に人气が集まっている。さらに、今や食事の部屋食は顧客を繋ぎとめる最低条件とさえ語る経営者も少なくない。

これは、隣接する由布院温泉が中小規模で個性を前面に出して大成功を収めたり、熊本県黒川温泉の「温泉手形」の爆発的な人気により、季節によっては予約が非常に取りにくい状態にまでなっているという状況から影響を受けたものといえよう。

これら成功を収めている温泉地は皮肉にも「別府を反面教師」としている点で共通しているのである。

## 第3節 湯治宿の状況

### 1 鉄輪温泉における湯治場の展開

鉄輪温泉における湯治場の展開について、まず、『鉄輪温泉並明礬温泉地旅館名簿』によると、明治20年（1887）から大正11年（1922）までに開業していた宿として15軒が記載されている。1887年に開業した3軒はいずれも江戸時代に開業している。明治・大正期に開業した旅館の分布をみると、旅館街は既に蒸し湯を中心に形成されていたことがわかる。

昭和にはいると、旅館開業は地元住民によるものと、外部出身者によるものとに区分される。まず地元住民が開業した旅館の多くは農業との兼業であった。湯治宿は農家が部屋の一部を湯治客のために賃貸していたものである。

その一方で、当時別府温泉郷には傷病兵が頻繁に療養に訪れており、鉄輪にも逗留し始めていたという。この受け入れのために開業した旅館もある。

昭和になると地獄地帯は「地獄とは簡単に言ふと噴氣孔の事である」と昭和12年（1937）に東京で出版されたガイドブックにも記載されるほどの観光資源となっていた。このため、当時鉄輪温泉は地獄地帯を観光地区とし、長期滞在の可能な自炊旅館が密集する湯治地区と地域分化が始まっていたのではないかと（小堀・山村2004、宮崎2008）。

また、湯治宿の開業は開業者自らが鉄輪に湯治に訪れたことがきっかけとなったという事例もある。例えば、豊後高田市と広島県の出身者が開いた宿が現存し屋号も出身地を用いている。

戦後、政府は戦禍に見舞われ荒廃した国土と、疲弊した経済を立て直す一つの方策として観光振興に努めた。別府温泉はその一役を担う国際温泉観光地としての位置づけを明確にした。

昭和20年代の鉄輪温泉の状況について、各種観光パンフレットからみると、「内湯完備」・「新築・改築」・「眺望」という文字が踊っている。

この表から昭和27年（1952）当時は、内湯を完備していることが旅館のアピールポイントとなっていたようである。従来の外湯つまり共同浴場に通う湯治スタイルから、内湯の利用スタイルへと変化しつつある様子が窺える。つまり、この頃からこれまで外湯中心であった旅館街の形成自体に大きな変化をきたすことになる。このことは、僅か2年後の同様の広告には既に「内湯完備」と銘打ったものがほとんど見られなくなっているのである。内湯の整備が急速に進んでいく実態が知れる。

その一方で、「眺望」をアピールポイントにしている旅館が増加している。中には2階・3階からの眺めのよさをアピールしているケースもあり、鉄輪温泉においても旅館の高層化がみられつつあったと推測できる。

また、学生協指定あるいは学校指定との記載もこの頃の宣伝文句としてみられる。地獄が近いことをアピールして、修学旅行の受け入れを積極的にアピールしている様子も知れる。さらに、「洋間」や「離れ家」の改装も行っており、広告のイラストから新婚旅行客も積極的に受け入れていたことが推測される。

	写真	内湯	新改築	眺望	その他記事
1	○	○	○		
2	○	○			
3		○			国鉄推薦旅館
4	○	○			
5					国鉄推薦旅館 日本交通公社協定
6		○			
7	○	○			
8		○			
9		○			
10	○				学校生協指定
11					
12	○	○		○	
13			○	○	
14		○			
15		○			

表8.3.1 昭和27年（1952）の鉄輪温泉旅館広告の内容  
注）宮崎（2008）をもとに作成



一方、昭和33年（1958）の雑誌『湯けむり』には「改築されて行く鉄輪温泉」という特集が組まれている。これを見ると、当時鉄輪温泉では部屋だけではなく温水プールや屋根付き露天風呂、さらに野天の蒸し風呂の改築・増築したことが確認でき、風呂に工夫をこらしている様子が伺える（宮崎 2008）。

高度経済成長期になると、鉄輪温泉は昭和39年（1964）の九州横断道路開通の開業も相まって大きく変貌を遂げることになる。横断道路の開業は旅館の分布地図を大きく塗り替えることになった。横断道路沿いに進出した旅館には別府市街も含めて鉄輪地区外から進出した者も多い。その一方、鉄輪地区内から進出してきた旅館もみられる。地区内から移動した旅館の多くは規模的には中規模であるが、施設面を充実させて対抗する動きが多かったようである。

この頃の鉄輪温泉は、規模としては中規模旅館に分類される旅館の多くが、大広間や温泉施設、売店、喫茶などを整備し、施設面において大規模旅館に匹敵する内容となっている。九州横断道路の開通に合わせた周遊観光ルート開設による宿泊客増を見込んだものである。また、旅館開業者も鉄輪地区以外の者が多い。加えて、昭和41年（1966）に開催された大分国体にあわせて施設を拡充したという背景もある。

この時期には鉄輪温泉集落内においても変化が生じている。この変化は小規模旅館の中からも、団体客や宴会客を新たに取り込もうとした旅館が増加し、その結果、多くの旅館は貸間専門の自炊宿から食事付の一般旅館へと経営形態を変えていったのであった（宮崎2008）。

高度経済成長期以降になると、まず旅館軒数の減少が顕著となってくる。

高度経済成長以前である昭和29年（1954）の67軒から、高度経済成長期の昭和38年（1963）には88軒、さらに高度経済成長の全盛期ともいえる昭和42年（1967）の97軒へと増加の一途を辿り過密化している。

また、高度経済成長が終わった昭和51年（1976）には、安心院町（現宇佐市）にアフリカンサファリが開業したこともあり大きな減少は見られなかった。

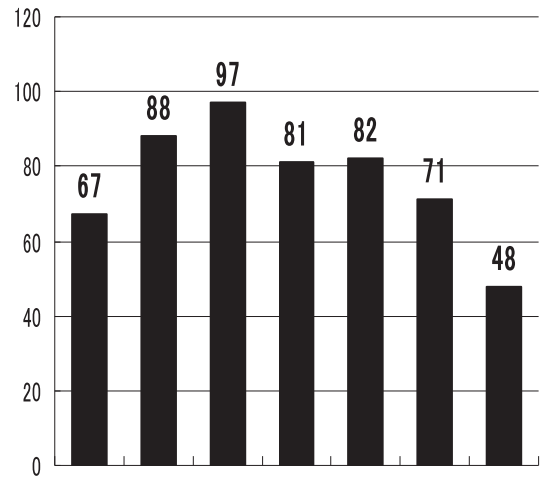
しかし、昭和63年（1988）に始まったバブル経済によって全国各地でリゾート計画が立案され、大分県でも別府温泉郷から湯布院・九重地区が「総合保養地域整備法（リゾート法）」に則って大規模リゾート開発の計画が持ち上がった。しかし、その完成を前にした1990年代前半にバブル経済は崩壊し、リゾート計画もご破算となった。

バブル経済崩壊後の平成8年（1996）の旅館数は71軒で、全盛期に比べるとおよそ30%減少している。また、平成20年（2008）現在は48軒と、この10年で23軒30%もの旅館が閉業し、全盛期と比べると半減したことになる。

その一方では、鉄輪温泉集落内では近年の健康志向の高まりとレトロブームを背景とした湯治ブームにのり、宿泊日数は1泊から2泊と少ないものの地獄蒸し料理など地域の特性を活かして堅調な経営を続ける旅館も存在する。

今日の鉄輪温泉は、およそ25軒もの自炊宿が営業を続けている。こうした実情からみると湯治場としての機能は存続されていると考えられる。また、多くの湯治客がこの地を訪れている。

その一方、大半の旅館の開業時期は別府観光が隆盛期を迎えた時期と一致する。とりわけ、地獄めぐりが全国的に人気を呼んだ昭和初期に開業した旅館が多い。このことから、鉄輪温泉は昭和初期という早い時期に観光温



1954	63	67	74	85	96	2008
以前	高度経済成長期		以降		平成年間	
宿泊基地・観覧型			野外レク・休養型		現在型湯治・宿泊基地	

図8.3.1 鉄輪温泉集落内旅館軒数の推移  
注) 宮崎 (2009) 18ページより抜粋

泉地へと発展を始めた場所といえよう。しかし、当時はまだ広域にわたる農村という後背地を抱えていたため湯治場としての需要は依然として高かったといえる。したがって、保養型の機能を強く残したまま観光化が本格化したのであった。

さらに、高度経済成長期には九州横断道路が開業しその沿いに大型旅館が進出してきた。これによって鉄輪温泉は観光地区と保養地区とに機能分化した。

	集落内の様子	九州横断道路沿いの様子	観光地区の様子
1 位置・交通	周遊観光道路附近、交通便利	周遊観光道路附近、交通便利	周遊観光道路・県道附近、交通便利
2 環境	集落過密化、湯けむり景観	道路沿いに点在、湯けむり景観	道路沿いに点在、湯けむり景観
3 発達	伝統的温泉地	新興	新興
4 資本	地元資本中心	別府温泉郷内資本、外来資本	保養所は外来資本
5 温泉	外湯(共同湯)、内湯、総有機能顕著	内湯、引湯、私有機能顕著	内湯、引湯、私有機能顕著
6 宿泊形態	自炊、半自炊、食事つき、低料金短期滞在(数泊)	食事つき、高料金短期滞在(日帰り・1泊)	食事つき、高料金短期滞在(日帰り・1泊)
7 客層	おもに会社員・中高年層 単独・小グループ	おもに会社員・中高年層 中規模の団体・小グループ	おもに会社員・中高年層 中規模の団体・小グループ
8 入湯圏	県内近隣圏のローカル観光市場	県内近隣圏のローカル観光市場	県内近隣圏のローカル観光市場
9 観光産業	旅館の他は日用食糧雑貨店、みやげ品店・食堂が多い。	みやげ品・食堂は旅館内で可能	みやげ品・食堂は旅館内で可能
10 労働力	家族労働中心	雇用力大	雇用力は保養温泉地より大
11 その他	自炊は地獄蒸し	周遊観光による客層	マイクロバスで送迎

表8.3.2 鉄輪温泉の地域別旅館経営の性格差  
注) 宮崎 (2008) 36ページより抜粋

さて、鉄輪温泉の現況についてこうした経緯を踏まえた上でみると全国的にも他に類を見ない形態を成しているといえまいか。つまり、この地は地獄巡りという今日においても第一級の観光資源を抱える大観光地である。明礬温泉と併せた年間宿泊者数は100万人に及んでいる。しかしその一方、25軒もの自炊宿(貸し間)も存在しているのである。その規模も全国唯一といえよう。このように、鉄輪温泉は観光地・湯治場双方において全国最大規模を誇る温泉地といえる。

今日の鉄輪温泉の状況を見ると、こうした状況を認識しながら将来に向けた方策を行っているといえよう。具体的には、一つには「温泉情緒」の再現に取り組んでいる点にある。当地においても一時期旅館の大型化が進んだが、それは湯治宿の集積している旧温泉街の脇を抜けている横断道路沿いに集中した。

旧温泉街は狭い路が入り組んでいることから、マイカー時代には観光地化の波から取り残された。しかし、今日の社会的な価値観を鑑みるとそれが幸いしたといえよう。狭い路地に点在する共同温泉と自炊宿といった風情は今や貴重な温泉景観である。例えば、こうした景観を残す山形県銀山温泉などは今や全国的に人気の高い温泉地となっている。鉄輪温泉も同様の風情を残した故に、映画のロケ地などにも使われている。

加えて、立ち上る湯けむりの景観は他所には見られないものである。これは熱水(源泉)温度が100度近い賜物である。この稀有な景観を活かそうと湯けむりのライトアップが実施されている。さらに、湯けむりを伝統的に日常生活に取り込んでいる鉄輪住民の生活を広く知ってもらおうとする取り組みも始まっている。

湯治宿にも変化が見られる。まず、湯治を体験型リゾートとして捉える向きが、観光者・宿側双方に定着しつつある。日本観光協会も2泊3日程度の「プチ湯治」を提唱し、長期滞在の本来あるべき湯治慣行とは違う角度からの売り込みを促進している。

こうした動きの背景は、一つに古い伝統に対する国民の目の変化したことが挙げられる。「七日一廻り」の本格的な湯治を実践する時間的な余裕はないが「3日程度で体験できるのならばしてみたい」という需要はかなり

あると聞く。さらに、健康ブームも背景にあらう。また、今日の国内観光は中高年者層に支えられているといっても過言ではない。湯治宿に投宿する客層もこうした年齢層が多いと聞く。この年齢層の宿泊客に聞くと「親が湯治を楽しんでいたから、今度は自分も試してみたい」と答える人も多かった。中にはこうした理由で1か月滞在している宿泊客もあった。

一方、若い世代にも湯治宿を訪ねる姿が増えつつある。彼らは湯治というものを体験してみたいとの理由で訪れていると聞く。

鉄輪温泉はこうした湯治に対する需要に加えて、湯けむり景観と地獄蒸し料理という他所ではまねのできない独自の地域資源を持つ。これらに対する関心も高まっている。湯けむり景観は「後世に残したい日本の景観100選」では富士山に次ぐ第2位を獲得した。このことは全国に知れ渡った。地獄蒸し料理も健康食ブームと相まって注目を集めている。

旅館経営者側も今日の観光者のニーズを探るとともに、観光を巡る動向に併せた対応をしている。例えば、ホームページの開設とインターネットによる予約受付を始める所が増えている。中にはこのおかげで若い世代の宿泊客が急増したという宿も目立つ。さらに、海外とりわけヨーロッパから予約が舞い込んでくることも珍しくなくなったという宿もある。また、部屋も個室を基本とするなど観光客のニーズに合わせてつつある。

確かに最近では、韓国・中国からの団体客に混ざって鉄輪界隈をバックパッカー姿で歩く外国人の姿を見かけることが多くなった。ある宿ではドイツからの宿泊客に「なぜ鉄輪温泉そしてこの宿を知ったのか」と聞いてみたら「ドイツのガイドブックに別府温泉のことと宿泊した宿が紹介されていたから」とのことであったという。宿の主人が自分の宿がまさかドイツのガイドブックに載っていると驚いていた。鉄輪温泉は今や世界的な観光資源なのである。

## 2 明礬温泉における湯治場の展開

明礬温泉の歴史は古いが、明治9年(1876)に刊行された「豊後国速見郡村誌」には、明礬温泉には照湯・小倉湯・明礬湯・今井湯・蒸湯があるとの記載がみられる。しかし、明礬湯のみは「浴場壺ヶ所、逆旅拾戸、浴客1ヶ年凡壺千人」と記され、10軒の旅館と年間千人程度の入浴客の存在が認められるものの、他の温泉については「土人ノ浴スルノミ」と記載され、地元住民の利用にとどまっていたことが窺える。

その後、湯の花生産が盛んとなりその名声が広まるにつれて明礬温泉を目指す入浴客も増えていった。明治末には旅館は12軒、大正10年(1921)には15軒と増えていった。

明礬温泉は村有の鶴寿泉と地蔵泉を中心に展開していった。鶴寿泉は下の湯・鶴亀泉ともいわれ、旧森藩主の命名になるという。明治35年(1902)に浴場が整備され、昭和10年(1935)以来市有温泉となり今日に至っている。現在の浴場は平成8年(1996)に改築されたものである。泉質は透明度の高い含鉄硫黄酸性泉で、効能は皮膚病、貧血等に効くといわれている。

一方、地蔵泉は上の湯とも呼ばれ、開湯の歴史は古く鎌倉時代とも言われている。江戸時代森藩の保護を受け、明治以降は鶴寿泉同様に朝日村有とり整備された。現在の浴場は平成5年(1993)に改築されたものである。泉質は酸性泉で白濁不透明、皮膚病に卓効があるといわれる。

明礬温泉の全盛期は大正から昭和にかけての時期であった。その頃は客馬車も通り、春のシーズンになると露

番号	宿名
1	岡本屋
2	えびす屋
3	大黒屋
4	松屋
5	湯元屋
6	山田屋
7	枡屋
8	鶴屋
9	小倉屋
10	大和屋
11	豊前屋
12	梅屋
13	車屋
14	松本屋
15	大阪屋

表8.3.3 大正10年(1921)当時の宿  
注)『別府今昔』より作成

店が立ち並び大いに賑わったとの記録も残り、鉄輪温泉を凌ぐ賑わいであったという。また、当時の鉄道省の支援も受けて内山地区に「キャンプ村」なる施設も設けられ亀の井バスも臨時バスを運行している。

しかし、その後鉄輪温泉は地獄巡りのコースとなり発展を遂げていくことになった。これに対して明礬温泉は、別府市街地から数 km 離れた標高300m の山中に位置し、さらに地獄巡りの遊覧バスコースから外れたことから次第に忘れられていったのであろう。

明礬温泉は皮膚病に効能があるとされ、第二次世界大戦終戦直後は、栄養失調が原因とみられる皮膚病患者が押し寄せ、どこの旅館も廊下にまであふれていたという記録も残る。しかし、風評によればこの皮膚病に効くという宣伝は鉄輪温泉からの申し合わせによるものであったとも伝わっている。鉄輪温泉は温泉の評判が良い明礬温泉に負けないために、鉄輪温泉は神経痛とリュウマチに効く、明礬温泉は皮膚病に効くとお互いに棲み分けようと考えたとのことであるが、真偽の程は不明である。

しかし、皮膚病患者はその後の国民生活の改善が進むとともに少なくなっていくという。

明礬温泉は昭和33年(1958)に大火事を経験している。この大火事は強風荒れ狂う12月に、一軒の旅館から出火した。吹き上げてくる強風にあおられて火は瞬く間に広がり、一時は集落全69戸焼失かと危惧の声も出た。しかし、風向きが変わり全戸焼失という事態は免れたものの、7戸を全半焼するという大惨事となった。この火災によって旅館4軒、食品店1軒が焼けさらに共同温泉鶴寿泉も消失してしまった。

このような苦難もありまた、高度経済成長期も別府、観海寺、鉄輪の諸温泉のような賑わいにも至らず、多少遅れてしまった感は否めなかった。

しかし、国道500号線が改良され、アフリカンサファリへの通り道となり明礬温泉は再び多くの観光客の目に触れることになった。こうして近年になると明礬温泉は再び息を吹き返してきている。第一に当地は他と異なり山間に旅館が点在するという自然環境が見直されている。今日、温泉地域に対するまなざしは「歓楽」から「癒し」にスイッチしている。この「癒し空間」として別府温泉郷の中では最もふさわしいものと評価されている。第二に山間を背景に立ち上る湯けむりと藁葺きの「湯の



写真8.3.1 明礬温泉全景



写真8.3.2 ごぼん風呂



写真8.3.3 鍋山の湯

花小屋」という独特の景観が人気を呼んでいる。この湯の花製造技術は国の「重要無形文化財」に指定されている。

現在、明礬温泉には9軒の旅館が営業している。その内6軒は、前述の1921年にはすでに開業していた老舗旅館で占められている。

最近、湯の花小屋をあしらった家族風呂も作られ人気を呼ぶとともに、各所に日帰り温泉施設も展開し、週末になると県外からの行楽客の姿が多くみられる。加えて、地元旅館によって「地獄蒸しプリン」が開発され売店は大いに賑わうとともに、今や別府名物の一つに数えられている。その他、「ざぼん風呂」などもこの温泉地で始められたもので、今では別府温泉郷各地で体験することができる。さらに、野趣あふれる「鍋山の湯」と「へびん湯」は近年の秘湯ブームに乗り、マスコミにも取り上げられ静かなブームとなっている。

現在、明礬温泉の地域住民に間で当地の独特の景観を残そうという機運が高まっている。研究者と共に地域の特色を勉強する会合を開き、地元の人々の間でも漏れてしまっている地域のお宝をよみがえらせようとしている。また、県内の大学生によって、明礬温泉の景観を構成する要素を探すフィールドワークも実施されるなど数々の取り組みを行い、地域の独自性を醸し出そうと努力を重ねている。



写真8.3.4 へびん湯

## 第4節 湯治客の意識

### 1 湯治客の変容

湯治は伝統的に「七日一回り」といわれているように、ある程度の日数滞在して行うのが一般的であった。さらに、ただ長湯に浸かればよいというのではなく、一応決められた方法というものがあつた。地域による違いはあるものの、大方は初日の入浴は1度、2日目は昼夜1度ずつ、3日目は昼1度夜2度、4日目は昼夜2度ずつと徐々に増やしていく方法が多かつたようだ。そして、後半の5日目からは減らしていった。

また、入浴時間も長ければいいというものではなく、泉質や効能そして入浴方法による違いもあるが、凡そ5～10分程度が良いとされる。

また、温泉の効能は、今日では成分から分析した科学的根拠に基づくもので、脱衣場などに泉質・成分。効能・禁忌行為などが掲示されている。さらに別府温泉郷では前述の通り独自に「温泉カルテ」と称したものも掲示されている。

別府温泉郷で古くから伝えられている効能としては、亀川温泉に筋の痛みに効くという「すじ湯」があり、浜脇温泉の「寿温泉」は子宝の湯とも呼ばれていた。また、鉄輪温泉の「熱の湯」は、身体の熱を除去することから、このように呼ばれるようになったともいわれている。鉄輪温泉の「蒸し湯」は足の怪我に効くといわれていた。

加えて、湯治は温泉の成分による効能ばかりでなく、寝食を共にする湯治仲間とのコミュニケーションや、周辺の環境との同化といった観点から、心理的・精神的なリラククス効果も高いといわれている。

湯治客を受け入れる貸間は近年減少し続けている。かつて鉄輪温泉には「鉄輪貸間組合」があり、昭和53年（1978）には46軒が加入していたが、平成16年（2004）には17軒になっていた。その後組合は解散してしまっている（印南2005、浦2006）。

湯治客の動向について印南の論考を元に見ていきたい。湯治客は大きく分けて2つのパターンに分けられる。一つは主に農家の方々の常連客、他方は近年めっきり少なくなったが療養・治療の客である。

今日別府温泉郷で湯治慣行が息づいているのは鉄輪温泉だけであろう。鉄輪温泉にはいくつかの共同風呂があるが、その中の区営温泉には地元組合員と宿泊客は無料で入れる。印南はその中の一つ「筋湯」には熱すぎて地元住民はあまり利用しないと記述している。いわば湯治客の共同湯とのことである。また、共同温泉は「かけ流し」である。当然のことながら地元住民は湯温調整のために水を入れることを極端に嫌う。湯治客は湯量や窓の開け閉めで湯加減を調整しなければならない。中には「熱いとおもったら、自分に合った湯を探してください」と掲示する貸間旅館もあつたという。

鉄輪の湯治客はこうした地域独特の入浴環境に合わせて逗留しなければならない。常連客の大半は心得ているはずである。

また、鉄輪温泉の貸間旅館には「蒸し湯」を設置している処が2軒ある。その内の1軒は常連客の利用でほとんど占められているようであるが、もう1軒の旅館には蒸し湯を目当てに訪れる客も多いと聞く。



写真8.4.1 蒸し湯 中野屋

## 2 現在の湯治客

さて、今日の湯治客はどのような意識で別府温泉郷にやってきているのであろうか。鉄輪温泉の事例をみていきたい。まず湯治客の動向で目に付いたのは、交通体系（アクセス）の変容とともに湯治形態も変化しているという点である。例えば、新幹線の博多開通は一般的には利便性が高まったと思われるが、かつて鉄輪温泉に大挙してやってきた広島県、山口県からの湯治客は減少したという。かつては広島と別府を直通でつなぐ急行列車があり、乗り換えなしで来ることができたが、新幹線の開通によってその急行列車は廃止となり小倉での乗り換えを余儀なくされた。鉄輪温泉まで通っていた湯治客も自身の高齢化とともに断念する事例が多かったという。今回広島県から訪れている湯治客から聞き取りをしたケースでは、現在は家族の送迎でやってきているとのことであった。また、広島県からの湯治客の動向は、さらに別府－広島航路の廃止も決定的な影響を及ぼしている。このように、別府と湯治客の所在地とをダイレクトに結ぶアクセスの廃止は、湯治客ならびに湯治宿、さらには別府温泉郷にとっては大きな問題である。このことは、四国航路の廃止も相次いでいることから、この方面からの湯治客の動向も同様であろう。

一方、湯治客の所在地の地域社会の変容も湯治客の意識に大きな影響を及ぼしている。大きな問題としては、地域社会においていわゆる「湯治世代」の世代交代がほぼ壊滅しているのである。つまり、「後に続く（次に湯治に行く世代）」がないという状況は、広島県はもとより、福岡県、大分県内と聞き取りした方々からの一致した声であった。

今日鉄輪温泉に滞在している湯治客の多くは、かつて祖父母や親といったごく身近な家族が湯治に鉄輪温泉に来ていたことに強い影響を受けたようである。当時の家族は長期間滞在していたので、その途中あるいは送り迎えに鉄輪温泉まで来ていたという方が多く、「自分もその年代になった」と感慨深げに話す方も多かった。このように、ある年代になったら行くことが当たり前となっていた家庭や地域社会（隣組）の環境が一変してしまい、こうした形の湯治は風前の灯といえよう。

しかし、鉄輪温泉は長期間にわたる湯治を支える機能がまだ備わっているとの声が多い。自炊を尊重する宿、自炊客相手の商店、そして毎年顔を合わせる馴染みの「湯治仲間」、このような全国でもまれな環境ゆえに、1か月単位で毎年何回かやってくるという客もいる。湯治宿側もこうした客層をいわゆる「最後の湯治客」として捉えているようである。「宿の経営はこの代限り」と決め、そのため常連客以外は断っている処も数か所ある。

その一方では、前述した通り新たなタイプの湯治客（体験型）の掘り起こしに努める宿もある。その一つとして、ホームページの開設とインターネットによる予約受付を始めた処がある。関係者によると、これまで宿泊客

		観光旅館	和風旅館	貸し間
宿泊者の女性割合		43.7%	48.8%	42.1%
平均年齢		44.9歳	37.6歳	56.8歳
職業	農林水産	1.4%	0.9%	12.0%
	無職	8.5%	5.9%	27.8%
同行者	単独	1.3%	1.3%	20.5%
	夫婦	40.7%	56.5%	28.5%
	家族	27.3%	18.4%	10.3%
	友人知人	7.3%	4.4%	19.8%
発地	関東	15.9%	4.1%	5.4%
	近畿	21.3%	5.3%	8.3%
	中国	13.7%	12.5%	16.1%
	四国	4.7%	7.5%	4.2%
	九州	31.9%	66.3%	60.9%
頻度	初めて	34.9%	26.3%	14.4%
	年1回	14.2%	17.2%	24.0%
	年2～3回	6.3%	15.6%	34.2%
宿泊数	1泊	86.2%	85.3%	40.7%
	2泊	12.0%	11.9%	20.8%
	3泊	0.8%	1.9%	9.0%
	7泊以上	0.6%	0.3%	17.8%
形態	1泊2食	62.3%	82.8%	25.4%
	素泊まり	1.5%	0.3%	43.6%
サンプル数		1289組	320組	409組

表8.4.1 別府温泉郷における宿泊者動向（1998年）  
（注）浦（2006）145～146ページより一部抜粋

として縁のなかった若者層からの問い合わせも入ってきているという。このようなユーザーの大半は予めホームページで情報を入手してから予約を入れてきているという。

「蒸し湯」が立て替えられる直前の平成16年（2004）に実施された湯治客の動向に関する調査結果をみると、一般の観光客向けの旅館と自炊形式の貸し間を併設している旅館ではあるが、「蒸し湯」を利用したという客は半数以下にすぎなかった（別府大学地理学研究室2004）。さらに、蒸し湯の存在を鉄輪に来て初めて知ったという宿泊客もおよそ半数に上っていた。同様の調査は一般旅館でも実施しているが、蒸し湯の存在については貸し間旅館とほぼ同様の結果でほぼ半数の宿泊者が知っていたが、利用した割合は22%と急落してしまった。建て替え前の「蒸し湯」はその存在は知られていたものの湯治客にとってはあまりなじみのないものであり、観光客にとってみれば鉄輪の名所であっても遠い存在であったのかもしれない。

しかし、平成18年（2006）9月に新装となった「蒸し湯」はその位置づけが大きく異なっている。オープンして3年目の2009年9月に有料利用者が10万人を突破した。年間の利用者数は3万3千人で倍増している。その上知名度も鉄輪を訪れる宿泊客の大半がその存在を知っており、さらに「蒸し湯」が目的という観光客も多く利用が大幅に増加している。

別府温泉郷の貸し間旅館宿泊者の動向に関しては浦が調査を試みている（浦2006）。これを見ると、湯治客の動向の特性が鮮明にわかる。職業・来別の頻度・宿泊数は一般的に言われている内容を裏付ける結果となっている。その一方で、女性の割合が観光旅館とほぼ同じであったという点は、湯治客には年配女性が多いというイメージとはかけ離れている。また、単独で貸し間を利用している人の割合が高いという点も特筆されよう。こうしてみると貸し間利用者の動向は一般観光客とは大きく異なっており、湯治宿が集積する鉄輪温泉は別府温泉郷の中でも独特の雰囲気にあることがわかる。



## 〈参考文献〉 第8章

- 浦達雄 2006『別府温泉郷の観光地形成に関する研究』（株）クリエイツ  
是永勉 1966『別府今昔物語』 大分合同新聞社  
恒松栖 2000『西暦2000年 別府風土記』（株）クリエイツ